東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻

2016 年度
修　士　論　文

祭礼を「維持」することの意味
―佐原の町の「持続」の観点から―
Meaning of Maintenance of Traditional Festivals
:from Viewpoint of City's Sustenance

2017 年 1 月 23 日提出
指導教員　清水　亮　准教授

清水　　賢一
Shimizu, Kenichi

祭礼を「維持」することの意味―佐原の町の持続性の観点から

第 1 章　はじめに
　1 節　社会背景
　2 節　先行研究の整理
　3 節　研究目的
　4 節　研究対象・手法

第 2 章　佐原地区の社会状況
　1 節　佐原地区の概要
　2 節　人口・人口動態の変化
　3 節　90 年代の転換点――町並み保存の機運

第 3 章　祭礼の成立と時代的変容
　1 節　祭礼の概要
　2 節　祭礼の時代的変容
　3 節　祭礼と観光政策

第 4 章　祭礼組織と維持問題
　1 節　祭礼組織の概要
　2 節　山車町内と「他町曳き」
　3 節　若衆連合と年齢階梯構造
　4 節　Ａ町の祭礼組織
　5 節　小括――祭礼組織の曲がり角

第 5 章　「維持」される祭礼と主観的意味
　1 節　祭礼組織とＵターン者
　2 節　Ｎさんの事例分析――Ｕターン者と祭礼
　　（１）Ｎさんの家業とＵターン
　　（２）ＮさんとＡ町の祭礼組織
　　（３）寡頭的コントロールとしての「前係り」
　　（４）Ｎさんからみた「祭りの面倒臭さ」
　　（５）Ｋさんの「時間の止まった町」
　　（６）祭りへの思いと葛藤
　3 節　小括――祭礼の主観的意味

第 6 章　「祭礼の維持」と「町内の持続」
　　1 節　「維持」と「持続」
　　2 節　「祭礼」と「町内」――結論に代えて

第 1 章　はじめに

1 節　社会背景

2016 年 10 月、18 府県 33 件の曳山祭から構成される「山・鉾・屋台行事」がユネスコの無形文化遺産に登録された。登録対象となった曳行祭は、いずれも重要無形民俗文化財に登録されている伝統的祭礼であり、何世紀もの長きにわたって地域に根付いてきた生活文化であった。その提案要旨によれば、「祭礼に当たり披露される芸能や口承に向けて、地域の人々は年間を通じて準備や練習に取り組んでおり、「山・鉾・屋台行事」は、各地域において世代を超えた多くの人々の間の対話と交流を促進し、コミュニティを結びつける重要な役割を果たしている[1]」とある。この点について、人類学・社会学・民俗学を中心とした都市祭礼研究が明らかにしてきたように、様々な事例地のフィールドワークから伝統的祭礼の社会文化的特性が着目され、地域の社会集団から切り離すことのできないものとして存在する祭礼の様態が各様に描き出されてきた。

一方で、戦後長らく続く共同体の解体と生活様式の均質化の時代の中で、担い手不足を中心とする維持問題を抱えるようになった伝統的都市祭礼も少なくない。とりわけ、全国各地の地方都市にみられる曳山祭は多くの経費と人手を必要とするものであり、現実の問題として対応せざるをえなくなっている。このような状況にあって、都市祭礼を存続させることの意味が問われる時代を迎えている。それは、祭礼の前提となっていた地縁共同体が瓦解しつつある時代にあって、それでもなお都市祭礼を続けていく意味はどこにあるのかという問いである。

たとえば地方自治体や商工団体の中には、伝統的祭礼を地域のアイデンティティを表す観光資源として位置づけ、保存継承していくという流れも当然に生じている。実際に、2016 年の無形文化遺産登録の対象となった曳山祭は、そのほとんどが旅行代理店や地元商

---

[1] 「山・鉾・屋台行事のユネスコ無形文化遺産登録について」序文（文化庁:2016）

工団体による観光ツアーや関連イベントが企画されていることが指摘できる。しかし、祭礼を一資源とみなす視点は、あくまで祭りを外から眼差しているに過ぎず、伝統的祭礼が地縁共同体の内なる自治原理によって存続してきたことを見落としてしまう。その点において、祭礼の内部たる担い手やそれに関わる人びとの立場にとっての祭りの意味を問い直す作業が求められよう。

２節　研究目的

本研究は、千葉県香取市佐原地区の山車祭りとその祭礼組織を事例に、この祭礼がどのような時代的局面を迎えており、どのような主観的意味の中で当事者たる地域社会とその成員に支えられているのかを明らかにするものである。

「佐原の山車祭」は江戸後期より続く伝統的な曳山祭の一つであり、上述した重要無形民俗文化財の一つとして知られる。その一方で、佐原地区（旧佐原市）は県下有数の商業都市として繁栄した歴史を持ちつつも昭和中期より商業の中心地としての地位を失い、近年は一貫した人口減少と若年層の流出傾向の続く地方都市となっている。

本研究は、佐原を事例地として地方都市の伝統的祭礼がどのような維持問題に直面しているのか、祭礼組織とその担い手を対象としたエスノグラフィーを通じて描き出すことを目的とするが、その中でも、本研究では佐原の祭礼組織内におけるＵターン者に着目している。それは、「自町出身者」の減少傾向の続く佐原の祭礼組織において、地元に還流して祭礼組織へと関わっていくＵターン者が特徴的な役割を有していること、また、Ｕターン者当人にとっても祭礼やその前提となる地縁共同体の存在が大きな意味を持っていることが挙げられる。それは、一般的な社会経済的条件による還流とは異なるＵターン者の事例研究を志向するものでもある。

３節　先行研究の整理

①都市祭礼と地域社会

日本の「都市祭礼」が直截的に学問の対象となったのは、1960 年代・70 年代のこととされている（福原:1999 23-48)。それまでも宗教儀礼や土着文化としての祭礼を扱った研究はみられた。しかし、「都市祭礼」研究は、祭礼を映し鏡としながら、その都市生活の実態の中から社会文化的な特性を見出そうとしたことに意義があると考えられる。

「都市祭礼は「共同の祭り」であり、「共同の企て」である。(……）祭りは都市に潜在的に組み込まれた共同性であり、都市に沈潜する心性を表現している。祭りは都市の社会構造を可視的に現出する機会でもある（田中 2007：69)」

そもそも「祭礼」の定義は柳田國男の『日本の祭』の中で行われており、「祭り」と区別されている。柳田によると、祭礼とは祭りの一種であり、風流と見物人が存在するものであ

るという（柳田 1998：378-382）。それは、祭りを見る人（ミル者）と祭りをおこなう人（スル者）の分裂が指摘したものであるが、それは都市が文化的な背景を異にする大量の人々の集住の場であるがゆえに生じたと考えられる。この点に関して、「村落が都市化していく過程において、祭礼が都市的様相の一端を示していることを指摘したものであり、『祭礼』にはすでに『都市的なるもの』という意味が含まれている」と指摘されている（中野:2007 1-23）。

しかし、柳田の定義によって即座に祭礼研究が開始されたわけではない。事実、『日本の祭』の中で柳田が研究の中心に据えたのは、物忌みや精進、直会といった神と人との交流の局面であり、あくまで「祭り」そのものであった。そのために「祭礼」は日常の秩序や規範からはみ出した行為として祭りから分化した一様式として片づけられていた。

その中で、「都市祭礼」研究の先駆をなしたのは、1960 年代、柳川啓一や薗田稔ら宗教学者による秩父神社研究である（谷部:2011 43-66）。彼らはリーチ・ターナーの儀礼論、あるいはデュルケームの集合的沸騰といった概念を援用しながら分析を始めていく。

その後、1970 年代に入ると、中村孚美や米山俊直、あるいは松平誠、和崎春日などの人類学者や社会学者らによって盛んに祭礼研究が行われるようになり、今日にみられるような「都市祭礼」研究が活況を見せるようになるが、前述したように、これらの研究群は山車の起源・芸能のやり方・系統の研究が主であった以前の都市の祭りの研究と違い、「祭りを支えているものは何か、市民にとって祭りとは何か、都市の祭りの特質は何か」（中村:1972 149）というようなそれまで見落とされがちであった問題に焦点をあてて、現代都市の文化と社会を解明することを主眼としていた。

このような「都市祭礼」研究の流れの中で、フィールドワークを主軸とした調査研究が組み立てられ、都市祭礼の現代的意味について議論が展開されるようになる。

この点について、前掲中野は、都市祭礼を当該社会の人々の自らの「場所」の獲得における主体性・戦略性と自己アイデンティティ構築の過程であると論じ、ミル側からスル側への移行のありよう、および相互性がその中心にあると述べている（中野:2007 25）。

一方で、祭礼の存在意義を積極的に位置づける立場に対して、「本来祭りが孕んでいる緊張関係への配慮が足りない『予定調和主義的な機能論』」という指摘（深澤:2010）も当然に生じるようになった。

また、人類学者の竹沢は、「都市祭礼とは、周辺地域から人的資源を（恐らく物的資源も）かき集め、それを支配するための一装置だったのではないか」（竹沢 1999：81）と問題提起する。博多祇園山笠の調査報告の中で、竹沢は、「祭りとは、地域社会が自己の存続と拡張のために、固有の資源としての人的資源を最大限に動員させるための装置なのであり、親和や共同性の感覚の提供と引き換えに、参加者の能力を地域社会に捧げさせることで、周囲の町村にたいして自己の優越性を示すことができた」（竹沢 1998：38）と述べている。

現実に単一共同体的な地縁が解体され、都市的生活様式の均質化が進んだ時代において、従来の祭礼研究に対する批判的視点が醸成されてきたと解することができる。

③祭礼の維持問題に関する先行研究

都市祭礼、とりわけその曳行に多くの経費と人手を必要とする曳山祭は、戦後の生活様式と生活意識の近代都市化と全国的な少子高齢化に合わせて、その担い手不足に直面することとなったが、既存の祭礼研究は独自の時間的変化の中で現実に即した形へと「柔軟」に変容を遂げていく祭礼の姿を記述してきた[2]。

都市人類学による祭り研究の系譜を受け継いだ和崎春日は、京都の盆の仏教行事である左大文字送火を事例に取り上げ、祭礼集団の維持の問題を取り扱っている。和崎は、祭礼参加者の中でも、役割分担上、参加度が最も高い地域集団を内部構造（「土着集団」）と捉え、そこから同心円的に町、地域社会、都市社会を見通すことを試みている。その結果、従来ほぼ独占的に祭礼に従事し、閉鎖性・自己完結性を保ってきた「土着集団」は、都市周辺部の市街地化・宅地化に伴い土地売却を迫られ、都市勤労者化するとともに、地域の混住化により、祭礼集団の開放を迫られたことが指摘された。しかし彼らは、自らのアイデンティティ保持のために「シンルイ」という祭りへの参加基準を設け、同時にこの言葉の柔軟性を利用した「狡猾な」方法で人手不足に対応していると、和崎は分析した（和崎：1976）。

また、前掲田中は青森ネブタ（ネプタ）の事例分析から「神社系の祭礼では、儀礼性が強固に守られる傾向がある」と述べている（田中:2007）。それは儀礼を守る担い手＝町内に住む氏子の存在が直結的につながり、山鉾の祭礼が長らく町衆の氏子意識に支えられるだけでなく、日常においても町内の伝統や儀礼を規定し、それらによる慣習を維持する役割を担うことによって「伝統的な共同」を守る中核的な存在となってきたと分析している。

芦田は、担い手不足による存続の危機に立たされた伝統的祭礼が辿る一般的なシナリオとして、参加条件の緩和による部外者の参入と、それに伴う祭礼組織の民主的再編と市場経済論理の侵入によって、ローカル文化としての自律性が弱まるという「祭りの日常化（日常生活が祭りのようになり、祭りが日常性から脱却できない現象）」を指摘している（芦田：2001）。「かつての祭りで「非日常性」が可能だったのは、おそらく、集団成員すべてが祭りに参加するとともに、その非日常性が外部社会の日常生活と無縁でいられたからである。（……）ところが現代の祭りは、日常的な活動・価値・規範・利害などによって包囲され、監視され、規制されつづけることになる」

しかし、吉田は、岸和田だんじり祭の事例を分析し、芦田の指摘する「祭りの日常化」が祭礼文化圏を介した広域的な文化の共有を前提にしたコントロールされた担い手動員によって、今なおローカル文化としての祭りの自律性の維持が保たれてきたと考える（吉田：2010）。彼は推進的な祭り文化と山車文化を共有する「他町」の曳き手の存在があり、「選択

---

[2] この点について、社会学者の田中重好は弘前ネプタ祭りの地縁ネプタに注目して、４つの町のネプタを比較検討し、同じ伝統的から出発しながらも、各都市で行われているネブタが実施される社会過程は各地域の社会構造の違いによって異なっており、町内レベル、企業レベル、都市全体レベル、さらにその都市の外側に至る多元的な次元に集団によって重層的に構成されているのが現代のネプタであると指摘し、その柔軟性を評価している。（田中:2007）

できない縁」と「選択できる縁」の中間に位置する「中範囲の地縁」としての〈再縁〉が現在の岸和田だんじり祭を維持していると結論づけた。

これらの議論は、近代化の過程において生じた地域社会の解体の中で「祭礼を存続させる前提となる共同性の秩序の意味」と「祭礼が生じさせてきた力の葛藤や支配の競合の意味」の問いを包含している。前述の芦田は「祭りの最大の社会的機能が共同体の（再）確認にあるとすれば、祭りの社会的基盤そのものである共同体の解体は、ただちに祭りを不必要にも不可能にもするはずである」と述べており、前述の竹沢らと同様に従来の祭礼研究に対する批判を行っている（芦田:2001 26-30)。

４節　研究手法・対象

本研究では、佐原地区Ａ町内の祭礼組織へのヒアリング・参与調査を主軸とした質的調査によって、調査データの整理と分析を行うものであるが、5 章においてはライフストーリー研究を踏まえた分析を行っている。ライフストーリー研究とは「個人が聞き手とのコミュニケーション過程をとおして過去の自分の人生や自己経験の意味を伝える語り」であり（桜井:2011 38)、語り手が「内的な自己を反省的に振り返り、そのなかにあるさまざまな葛藤を調整し、過去から現在へ至った自己の意味に一貫性をあたえて全体を構成する」ことに着目するものである。

本研究では、祭礼の担い手として佐原地区内におけるＵターン者の存在に着目しているが、Ｕターン者にとって地元への還流は当人のキャリアを決定するうえで重大な意味を有するものである。しかし、社会経済上の競争力を失いつつある地方都市においては、一般的な要因から還流行動を説明するよりも、Ｕターン者個人の固有的な事実・経験に大きく左右されている現状が想定できる。そこで、本研究では特徴的なケースを取り上げながら、Ｕターン者にとって還流行動の意味と生活のリアリティがどのように立ち現われうるかを掘り下げていく。

なお、本研究では、それまでのフィールドワークの過程において、実際にＵターンには至らずとも地域に関わり続けている他出者や厳密にはＵターンではない出身者など、多様な状況にある出身者に対してヒアリング・参与調査を行ってきた。

具体的には佐原のＵターン者・他出者へのヒアリング・参与観察を中心としたフィールドワークを実施した。その過程で、千葉県香取市佐原地区のまちづくりに関わる個人・組織を対象としたヒアリング調査（2015 年 5 月～12 月）や地元の学校組織・行政組織・NPO 団体・市民団体等と連携した空き屋活用のアクションリサーチ（同年 10 月～）から佐原のまちづくり組織について調査を行っている。また、2016 年 6 月よりＡ町内の祭礼運営組織である若衆連合の参与調査に取り組み、Ｕターン者を中心に祭礼関係者に適宜ヒアリングに取り組んできた。

第２章　佐原地区の社会状況

佐原は、昭和中期以降の交通手段の変化と周辺都市の伸長にともなって、商圏としての地位を他地域へ譲ることとなり、近年では若年層を中心とした人口流出の続く地域となっている。一方で、そういった状況を憂う市民を中心に町並み保存運動が展開された地域として知られるようになった。本章では、調査データの整理・分析を行う前に対象地区の概要と当該地区の時代的変容について言及するものである。

１節 佐原地区の概要

佐原は、千葉県北東部に位置する香取市の一地区である。香取市は、2006 年 3 月に佐原市（現在の佐原地区）と香取郡に属する小見川町、山田町、栗源町が合併することで生まれた、人口 78,982 人の市である[3]。東京から約 70km、成田空港から約 25km に位置するほか、利根川をはさんで茨城県潮来市と接しており、江戸時代より利根川水系によって形成された水郷の町としても知られている。

佐原の町としての起源は、舟運を利用した定期市に遡るという。南北朝時代には牛頭天王社（のちの八坂神社）を中心に六斎市と呼ばれる定期市が開かれ、佐原の中心部に位置する利根川支流の両岸に本宿・新宿の二つの組が形成されていた。やがて江戸時代に入ると、徳川家康の利根川東遷事業をきっかけに利根川氾濫原に広がる水田と江戸川・隅田川への水運を利用し、北総地域で生産された江戸向けの米穀の集積地として更なる賑わいを見せるようになる（港北商業期）。これにより、佐原周辺は新田開発が進んで一大穀倉地帯となると同時に、東北地方の物資輸送の中継地として発達するようになり、小野川（佐原の中心部に位置する利根川支流）両岸に問屋街が形成されるが、これらの問屋街に土地を持たない商人や職人が多く流入したため、問屋街の把握のために「町（ちょう）」と呼ばれる下部組織が作られている。また、江戸幕府の直轄領であったことをから自由闊達な商業都市として、旦那衆とよばれる豪商による町人自治の文化が根付くこととなった。この佐原村の栄華について、江戸に優るとも劣らない「江戸優り」であると時の流行り唄で唄われている。このような町方の存在が、後述する付け祭としての山車祭の出現とその奢侈化につながっていく。

近代に入り、陸上交通網が整備されるようになっても隆盛は保たれ続けた。明治以降も県下でも有数の商業都市として発展した佐原は、明治 13 年（1880 年）の郵便為替取扱高において、振出金において１万 3000 円と県内１位、物品仲買数 21・卸商数 117 と東金に次いで県内２位の数字を記録している（佐原市教育委員会:2001 40）。また、明治 31 年（1898 年）に民営の成田鉄道の駅として佐原駅が開通すると、東京本所まで 3 時間半でつながることとなり、舟運から鉄道への積み替え駅としての性格を強めていくことになる。なお、これに

[3] 出典：香取市住民基本台帳（最終閲覧：2017 年 1 月 15 日）

ともなって商業の中心が小野川沿いから駅周辺へと移っていくことになるが、依然として千葉県北部において大きな商圏を有していた（地域商業拠点期）。一方、村外から新興商人や豪農が多く流入するようになったために旧来の旦那衆はその特権的な地位を失って次第に没落し、旦那衆による身分制の崩壊と新旧商人による権力争いが見られるようになる。

図 1 清見屋の跡地写真

しかし、戦後の高度成長期をむかえると、利根川の土地改良事業にともなう水郷の消滅・自動車輸送の全国的普及から商圏としての求心力を失うことになる。

1970 年代に入り、成田空港や鹿島工業地帯が登場するようになると、産業の集積地としての地位はいよいよ低下することになった（商業停滞期）。また、1970 年には舟運需要が途絶えたために佐原港が廃港となっている。

これにより広域商圏の核として保たれていた交流人口が激減し、駅前商店のシャッター通り化が進んだ。1990 年代には駅前商店の象徴的存在であったデパートメントストア、清見屋とポポ（十字屋）が相次いで閉店し、駅前商店の衰退は決定的なものとなった。現在、商業の中心は駅の北側にある国道 356 号線のロードサイドへと移行している。

一方で、そのような状況を憂う市民が中心となり、90 年代以降に香取街道と小野川の交差する十字エリアを主とした町並み保存運動が展開された。96 年には関東で初の重要伝統的建造物群保存地区の指定を受け、今日に至る佐原の観光地化が急速に進むことになる。これらの経緯から、佐原は官民協働で町並み保存を達成した一例として注目を集めることとなった。

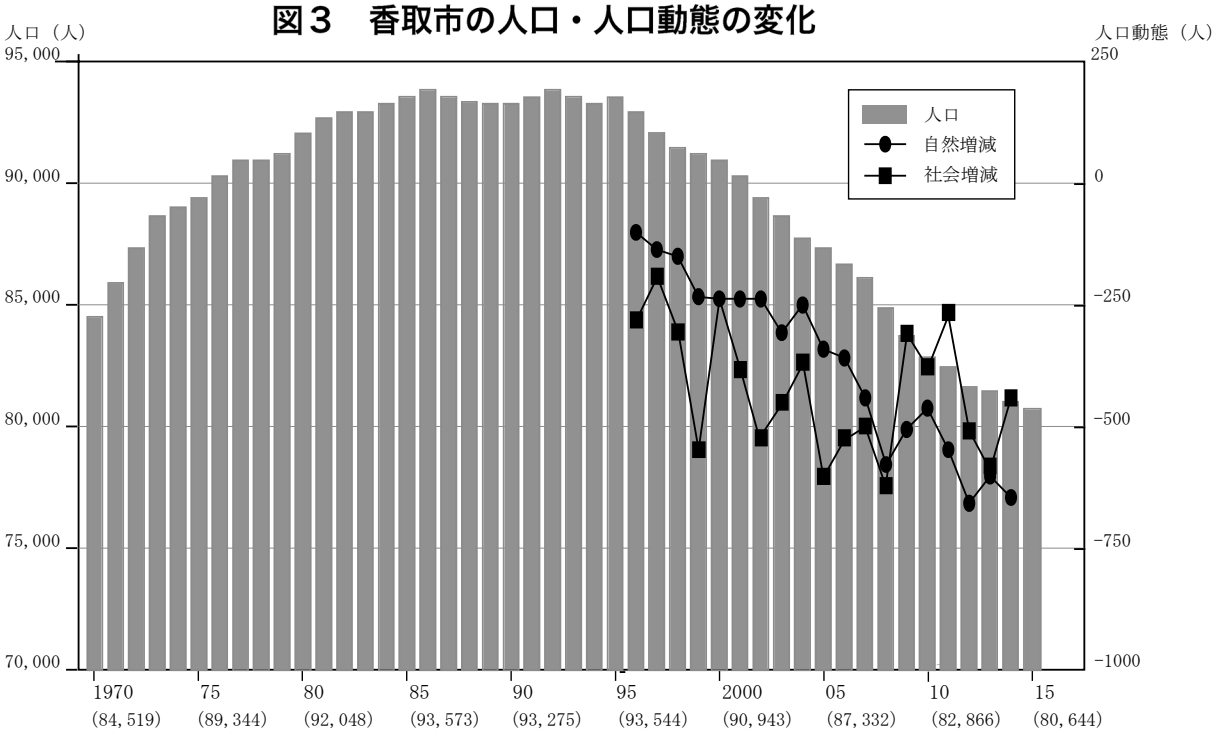
図 2 佐原地区図（S=1:15000）

２節 人口・人口動態の変化

前節でも述べたように、佐原は利根川の東遷以降、物流の要衝として江戸時代から昭和初期にかけて北総地帯随一の商圏を築いたが、1931 年（昭和 6 年）の成田線（佐原-笹川間）開業にともない、銚子と都心部をつなぐ鉄道輸送が可能になったため、舟運による物資の集積地としての役割を失いつつも、単純な人口規模は 1985 年にピークを迎えるまで増加を続けた。しかし、その時点で空港開設にともなう成田ニュータウン・内陸工業団地の造成、鹿島・神栖を中心とする鹿島臨海工業地帯・工業団地の開発が行われ、商圏としての地位を周辺都市に譲ることとなる。

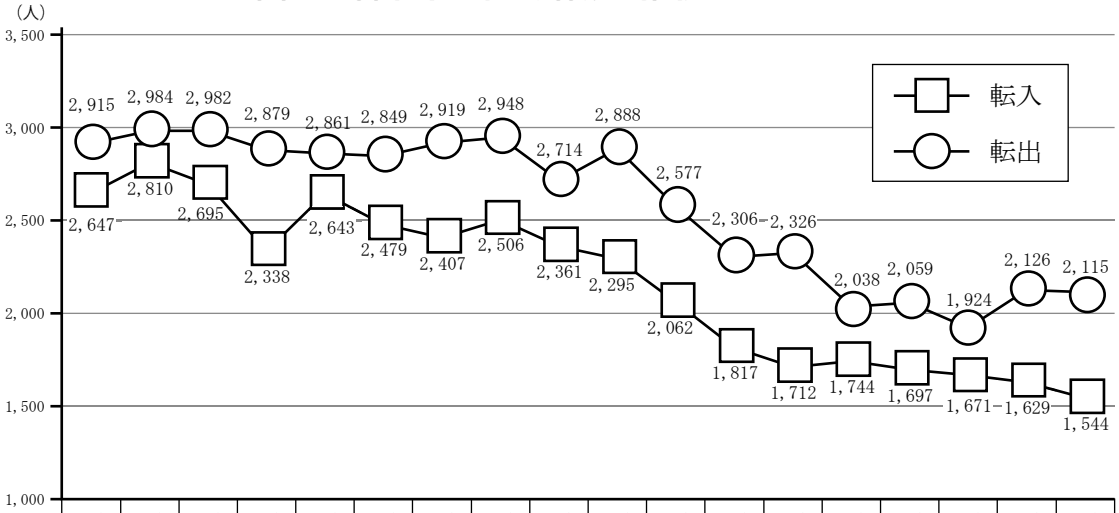
このような社会状況のために、佐原地区は 90 年代に突入すると自然増減・社会増減ともに一貫した減少を示すようになる。とりわけ自然増減については出生数減・死亡数増が続いており、自然減の拡大傾向が指摘できる。国立社会保障・人口問題研究所の推計（香取市:2016）によれば、香取市の老年人口は「団塊の世代」が 75 歳を迎える 1925 年前後まで増加・維持を続けたのち、1930 年代以降、老年人口・年少人口・生産年齢人口のいずれも減少する、いわゆる人口減少の第三段階に移行すると想定されている。

図３　香取市の人口・人口動態の変化



出典：香取市統計書（住民基本台帳・人口移動報告）より筆者作成
2006年以前は、合併前の佐原市・小見川町・山田町・栗源町の人口の合計

図４　香取市の社会増減の推移



	平成8年(1996)	平成9年(1997)	平成10年(1998)	平成11年(1999)	平成12年(2000)	平成13年(2001)	平成14年(2002)	平成15年(2003)	平成16年(2004)	平成17年(2005)	平成18年(2006)	平成19年(2007)	平成20年(2008)	平成21年(2009)	平成22年(2010)	平成23年(2011)	平成24年(2012)	平成25年(2013)
転入	2,647	2,810	2,695	2,338	2,643	2,479	2,407	2,506	2,361	2,295	2,062	1,817	1,712	1,744	1,697	1,671	1,629	1,544
転出	2,915	2,984	2,982	2,879	2,861	2,849	2,919	2,948	2,714	2,888	2,577	2,306	2,326	2,038	2,059	1,924	2,126	2,115
社会増減	△268	△174	△287	△541	△218	△370	△512	△442	△353	△593	△515	△489	△614	△294	△362	△253	△497	△571

出典：総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数に関する調査」

一方、全国的に若年層の地元・Ｕターン志向が高まっているにかかわらず、社会増減についても同様に減少幅が大きくなっていることが指摘できる。

人口移動調査によると、2004 年から 10 年連続で国内の人口移動が減少しており、年齢別コーホートにおいても若年層のＵターン経験者、地元に留まる者の割合が増加していることから、90 年代後半以降に進んだ若者の都市志向による人口流出の下げ止まりが指摘されている。

佐原市においては、人口減少の進んだ 90 年代後半以降、横ばいになる形で転出者数が転入者数を上回っていたが、近年は転出者数・転入者数ともに減少した。とりわけ、転入者数は低い水準にとどまっている。このような状況にあるため、旧・佐原市を含む香取市は、現在県内で最も人口減少の大きい地域の一つとなっている。なお、2012 年は東日本大震災の影響で転出者数が増加していることに留意されたい。

図５　５年前居住地が現住地と異なる人の割合（%）

	総数（人）	居住地が異なる人の割合（5 年前居住地別、%）					
		計	現在と同じ都道府県内			他の都道府県	外国
				同じ区市町村	他の区市町村		
第 7 回	26,212	24.7	18.2	11.8	6.4	6.0	0.5
第 6 回	26,653	28.1	21.6	14.6	7.0	6.2	0.4

出典：国立社会保障・人口問題研究所 第7回人口移動調査

* 調査時の年齢 0-4 歳、年齢不詳、および 5 年前居住地が明らかでない人は除く。

* 岩手県、宮城県、福島県を除く。

図６　千葉県の市町村の人口減少数・減少率（降順）

減少数順	人数(人)	減少率順	率(%)
市原市	-5,858	鋸南町	-10.35
銚子市	-5,779	長南町	-9.56
香取市	-5,340	長柄町	-8.67
山武市	-3,858	九十九里町	-8.24
茂原市	-3,285	銚子市	-8.23

出典：平成27年度国勢調査より筆者作成

1985 年に一度ピークに達した佐原市の人口は、1995 年以降一貫した人口減少を続けている。それは「自然減」「社会減」が並列的に進んだ結果であるが、それは「自然減」を主な要因とする「人口減少社会」モデルよりも、流入の鈍化と転出の増加による「社会減」の影響が先行したものと説明できる。1960 年代以降のモータリゼーションと周辺都市の伸長の中で、かつて佐原を生活の基盤として住まっていた若年層が教育・就業機会がより魅力的な居住地を求めるようになっていった。中心市街地が駅前からロードサイドに移ったことも追い風となった。1990 年代以降の「自然減」は、1960 年代以降の「社会減」によって準備されたものであった。それは昭和初期までの「佐原で生まれ、そのまま一生を終えるようなライフコース」が選ばれなくなりつつあることを意味する。たとえば、下図は、平成 26 年度における香取市の転出者数・転入者数の世代別の内訳を示したものであるが、若年層、とりわけ 20-24 歳、25-29 歳の転出超過がみられる。一般に、就学・就職・結婚のいずれかに伴って生じる若年層の地域移動は、都心から 70km 圏に位置し、都市部への通勤・通学の困難な佐原にとって不利な状況にあると結論づけられる。

図７　香取市における転出者数・転入者数（男性）

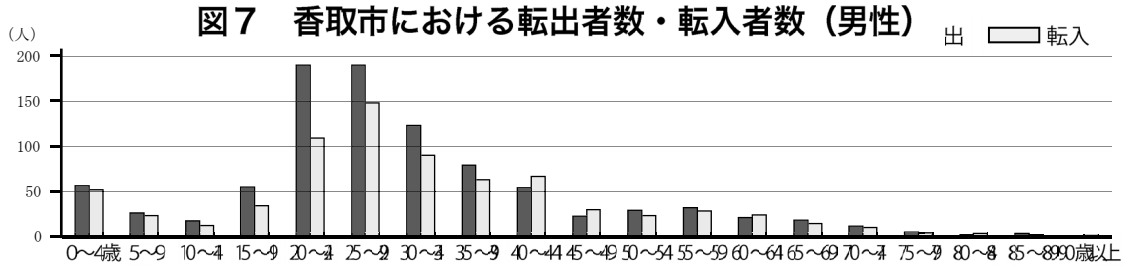
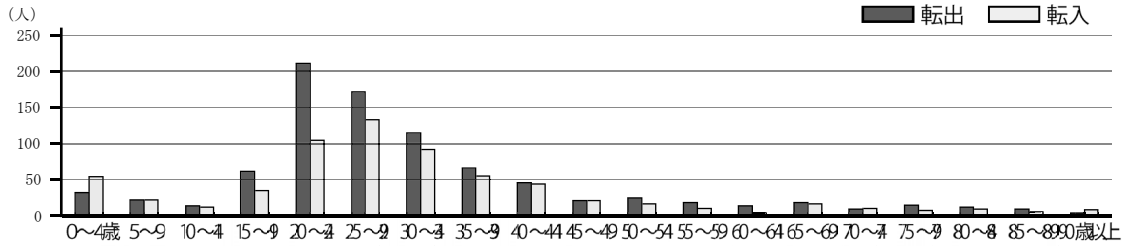


図８　香取市における転出者数・転入者数（女性）



出典：総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数に関する調査（2014 年）」

３節　90 年代の転換点と観光地化

２節で述べたような社会状況に直面する中で、佐原の人びとが選び取った「戦略」は町並み保存であった。それは、今日にいたる一連の観光地化の端緒でもあり、それ以来、「町並み」と「祭礼」は佐原の地域資源として、その観光政策に位置づけられていった。今日の佐原の「まちづくり」は、住民を中心とした様々な主体が個別に活動を行っていく中で全市的なまちづくりのフレーミングが形成され、相乗効果を為したものと評価されている（白井:2009）。

本節では、佐原における「町並み保存」に焦点を当て、今日に至る佐原の「まちづくり」がどのようなプロセスで展開されてきたかを整理する。

①1988 年以前――「町並み保存」の前史

佐原の町並みは、1996 年に関東で初めて重要伝統的建造物群保存地区（以降、重伝建地区）に指定されている。伝建地区に指定されたのは、忠敬橋を中心として小野川沿いと香取街道の交差する南北 700 メートル、東西 1000 メートルほどの十字エリアである。この伝建地区は、明治・大正期まで佐原の中心市街地として繁栄しており、今日においてもシンボル的な場所となっている。その指定種別は「商家町」であり、選定基準も「伝統的建造物群及びその周囲の環境が地域的特色を顕著に示しているもの」と評価されている。

佐原の伝建地区が初めて学術的な調査の対象となったのは 1975 年のことであった。それは、1975 年の文化財保護法改正に合わせ、その事前調査のための第 1 次伝統的建造物群保存調査の対象地の一つに選ばれていたことによる。この流れを受け、80 年代初頭には日本観光資源財団（現、日本ナショナルトラスト）のもとで体系的な町並み調査が行われている。その報告書が「佐原の町並み：よみがえれ、水郷の商都」（観光資源調査報告 Vol.11，1983 年 10 月）であるが、この研究調査は後述する佐原の町並み保存運動に大きな影響を与えることとなった。

しかし、当時、住民のなかで具体的に町並み保存の機運が高まることはなかった。むしろ、「古い町並み」を近代化し、「小野川」を埋め立てるべきだといった開発を望む声も多かったという[4]。それは、文化庁の評価の対象となった「歴史的な町並み」は、江戸時代に舟運による物流拠点として成立した旧中心市街地が時代に取り残されることによって「静態保存」されたという認識が根強かったためである（香取市:2008）。地域住民は、明治・大正から続く町割りを保持した古い町並みではなく、現代的で利便性の高い開発を望んでいた。しかし、実際の商業の中心が駅前商店街に移転していたこともあり、特に大きな開発が進むことなく、高度経済成長期以降も旧中心市街地の町並みはその形態を保持し続けた。

[4] 前述の町並み調査を行った福川は「小野川蓋説」と呼称している（福川:2004）。

②1988～1996 年――「町並み保存」の展開と伝建指定

このような状況の中で、佐原の町並み保存運動の機運が生まれたのは、1988 年から 1989 年にかけて全国の市町村を対象に行われた「自ら考え自ら行う地域づくり事業」、通称「ふるさと創生事業」であるとされる。「ふるさと創生事業」は、当時の竹下登首相の発案で、地方自治体主導での地域振興を目的に全国の市町村に一律１億円が交付されたものであるが、その１億円の使い道を募ったところ、住民の一人から佐原の町並み保存のアイデアが提案されたのである

「多くの寄せられた意見から、町並み保存がまちづくりに有効な手段であると選定された。市役所内部で十分な検討を加えた後、住民との話し合い（「まちづくりを語り合う場」）が持たれる中で、「佐原の町並みを考える会」（「小野川と佐原の町並みを考える会」に改称）が結成された[5]」

ここで結成された「佐原の町並みを考える会」（以降、「考える会」）は、佐原の町並み保存運動とそれ以降の観光まちづくりの流れを牽引する団体として中核的な役割を果たすことになる。「考える会」は、住民へ向けた各種勉強会や町並み調査を行い、1992 年には町並み保存計画書が市（当時佐原市）に提出されている。そこから市側も町並み保存に積極的に働きかけるようになり、以降は官民協働による町並み保存が進められるようになった。

「私達は平成３年にこの回を作ったのだけど、その時にバブルがはじけた。ライフスタイルも変わってきて、一週間のサイクルが土日で買い物をするような傾向が生じる。しかし、それでは中小規模の店舗では対応できない。それで商店街も寂れていく。セットバックなんかできる力がなくなってしまったから。アーケードを作って歩道を作ってということができない。そこで高橋先生（筆者注：「考える会」初代代表）が自分のうちを直してお金がもらえる。そのうえで観光客がやってくる。そこで経済が回るという提案をした。けれど、誰も信じなかった。そのころ成功した場所もなかなかなかった。（……）何のための保存でもって、なんのために自分のうちを守るのか全然意味が分からなくなった。それでも、とりあえず乗っかってみようかというのが 25 名。高橋先生の講演会で 25 名集まって、そこで名前と住所を書いてもらってできたのが考える会。そこからひたすら勉強。なんでこの町を残さなきゃいけないのか、なんで先生を呼ばなければいけないのか。（……）そこから我々の活動が始まった。説明会で行政や我々が協力していたけど、数人来てもらえば拍手。（「考える会」ヒアリング）」

町並み保存運動を展開する上で、大きな鍵となったのが住民の賛同率であった。地権者を中心とした運動でなかったために一人ひとりの説得する努力が行われた。早期から行政と連携した活動であったこともあり、最終的には 92%の賛同率を得て基本計画書の提案が行われている。

---

[5] 小野川と佐原の町並みを考える会ホームページによる。「町並み保存の経過と観光まちづくり」『町並み保存資料集』http://sawara-machinami.com/npo/source-book/town-planning（最終閲覧、2017 年 1 月 22 日）

これらの経緯から 1996 年、関東初の「重要伝統的建造物群保存地区」へと指定され、伝建地区内の修理・修景が進められた。これに歩調を合わせるように、伝建地区を中心とした観光地化が急ピッチで進んでいく。また、後述するように大祭関係者の方でも独自に祭りの観光資源化が進められており、相互の活動にシナジーが生まれることとなった。

③1996 年以降――多様なアクターによる観光まちづくりへ

1996 年以降は、行政による「まちづくり型観光」のフレームが積極的に打ち出されることになり、JR 佐原駅周辺地区、小野川周辺地区、本宿耕地地区をそれぞれ中心市街地として、「水郷の小江戸・産業観光でにぎわいを再興」することを目的とした中心市街地活性化計画の策定が行われている。2001 年には、商工会議所がＴＭＯに認定されたことによって、商工会議所を中心とした様々なプロジェクトが打ち出されることになる[6]。ＴＭＯの実施主体となった「ぶれきめら」は、佐原市民と佐原商工会議所、当時の佐原市の３主体が出資して 2002 年に発足し[7]、小野川遊覧船やシャトルバスの運営、駐車場や観光者向けレストランの設置などを行っている。2001 年に「まちおこし佐原の大祭振興協会」、2004 年に「考える会」が相次いでＮＰＯ法人格を取得するなど、様々な活動主体がボランタリーな任意団体から安定的・継続的な活動団体へと推移している。

一方で、「佐原おかみさん会」が 2004 年に結成されており、既存のまちづくり組織と異なった流れを汲む佐原のまちづくり組織として定着する。その主要メンバーは地元商会のおかみさんを中心とした主婦層によって構成されており、ハード面の大きい「町並み」、男性社会の「大祭」のいずれとも異なる主婦を中心としたソフトな観光まちづくり活動を行っている。主な活動を占める「まちぐるみ博物館」は、「各家の昔の調度品や商売に関わる道具や資料、長い歴史を持つ蔵や庭園など生活に密着した形で佐原の伝統の技や文化にふれることのできる」エコミュージアム的な展示物として地区内に 40 館ほどの「博物館」が設けられている。これらの活動の他、毎年５月・８月には小野川沿いで大規模なイベントを企画するなど、佐原の観光まちづくりの大きな主体の一つとなっている。「おかみさん会」は、行政・「大祭」関係者・「町並み」関係者といった既存のまちづくり主体と接点を持ちながら、その活動を展開してきた。それは「おかみさん会」が後発のまちづくり組織であり、それまで個別に活動を行っていたまちづくり組織に対してフラットな立場にあったことが大きいという。それでも積極的な相互交流が持たれているわけでなく、基本的にはいずれのまちづくり組織も独自的に活動していることが伺える。

しかしながら、主要関係主体が、相互に無関心であったにもかかわらず、それぞれが各々

---

[6] 2001 年に商工会議所が策定した TMO 構想においては、10 の目的と 55 のプロジェクトが設定されており、町並み・大祭といった様々なテーマにおいて統合的な観光計画が目指された（白井:2009）

[7] 資本金 5500 万円のうち、市の出資分は 300 万円分であり、一般的な「第三セクター」よりも民間が主体となっていることが指摘できる。

の目標を達成するために熱心に活動したことが、結果的に「意図せざる相乗効果」を産んで、互いの活動に好影響を及ぼしていったと白井（2009）は分析している。また、いずれの組織においても早い段階で市との協働が見られ、具体的に活動の働きかけを行うなど、佐原のまちづくりにおいて行政の果たす役割が「単なるサポート役」を超えていることが同様に指摘されている。

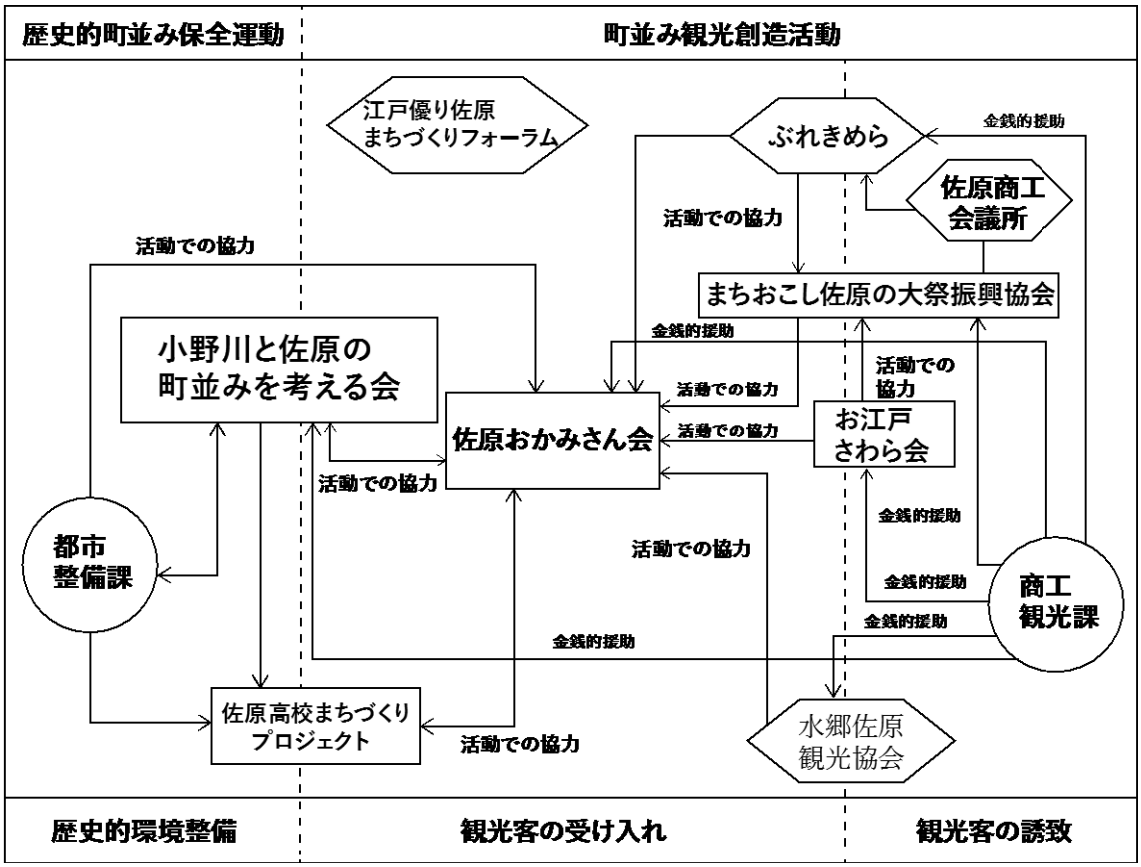


図９　佐原のまちづくり関係者図（都市整備課委託事業報告書をもとに筆者作成）

佐原の住民が取り組んできた町並み保存運動は、町の衰退に危機感を持った住民が自らの依って立つ基盤を見つめなおすところに始まり、町並みをはじめとする地域資産が見直される具体的な契機となったと評価してよいだろう。それは、「ふだん見ていた当たり前の風景が当たり前でないことに気づかされた」という住民の声に端的に表れている。

一方で、これらの活動がボランタリーな市民活動と観光産業と直截の利害関係を持つ商業関係者によって支えられており、住民の多くは日常的接点を持たないことも確かであった。いずれの組織においても 20 代～30 代の若年層はほとんど見られず、新たに離合集散を繰り返しつつも全体的な担い手の高齢化・固定化を迎えている現状にある。ソフト的な観光まちづくりが展開されてきた佐原においては、これらの活動の持続性も含め、観光産業をどのように位置づけていくかが問われる局面を迎えつつあるといえるだろう。

第３章　祭礼の成立と時代的変容

都市の祝祭が「日常生活の反転、それからの脱却と変身によって、日常的な現実を客観化・対象化し、それによって感性の生活を復活させ、社会的な共感を生み出す共同行為」と定義されるように（松平:1990 8-21)、神社祭礼に代表される伝統的な都市祭礼、共同体的な社会統合に欠く現代的な合衆的祝祭、そして、祝祭とは似て非なるイベントのような疑似的な祭礼にいたるまで――それが過去と現在においてあまりに異質なものであるとしても――それぞれの時空間における地域の在り方を示す行為として存在した。

佐原の祭礼もまた、地域固有の文脈の中で半ば必然的に生み出されたものであり、佐原が直面したそれぞれ時空間の中で維持されてきたものであった。本章では、そのような佐原の祭礼について、祭礼組織への参与調査と佐原の祭礼に関する内外の言及や先行研究から、その概要と背景を暫定的に整理する。

１節　祭礼の概要

佐原の山車祭は、夏祭りと呼ばれる７月９日以後の金・土・日に行われる小野川右岸に位置する本宿八坂神社の祇園祭と、秋祭りと呼ばれる 10 月第二金・土・日に行われる小野川左岸の新宿諏訪神社の大祭との総称である。

両神社の行事は、神輿の神幸を含めた神社の年中行事と山車の曳き廻しを行う山車行事に分けられるが、一般には後者の山車行事が知られており、両神社の氏子町内の人びとを中心とした祭礼組織によって、祭りの準備と運営がすすめられ、夏祭りには 10 台、秋祭りには 14 台の山車が盛大に曳き廻される。曳き廻しに使われる山車は町内ごとに保有されているが、いずれの町内も戦前から参加している氏子町内であり[8]、1980 年代に山車の破損をきっかけとする資金繰りと恒常的な人手不足から不参加となった 1 町内をのぞき、今日に至るまで連綿と営まれてきた伝統的な祭礼である。国の無形民俗文化財に指定されているほか、冒頭でも述べたように 2016 年にはユネスコの無形文化遺産に登録された「山・鉾・屋台行事」を構成する祭礼の一つとなっている。

佐原の山車祭のルーツは、旦那衆、とりわけ水運業で富を蓄積した商家・醸造家・豪農地主が町内の蔵方・職人をねぎらうために付け祭を盛大に行ったことにある。祭事そのものは、寛永 14 年（1637 年）に八坂神社が現在の位置に勧請したことにあるが、諏訪神社に関してもほぼ同時期に始まったとされており（清宮:1995)、元禄期には鎮守御祭礼の付け祭として、傘鉾や花万燈祭礼をてんでんに持ち歩いていたことが記述されている[9]。しかし、次第に町並みが整い、町衆が財力をつける中で町内ごとに山車が作られ、享保 6 年（1721 年）

[8] 昭和初期、当時最大規模の人口を有していた町内が２町内に分かれたケースがある。
[9] 嘉永元年、伊能源太郎文書中による。

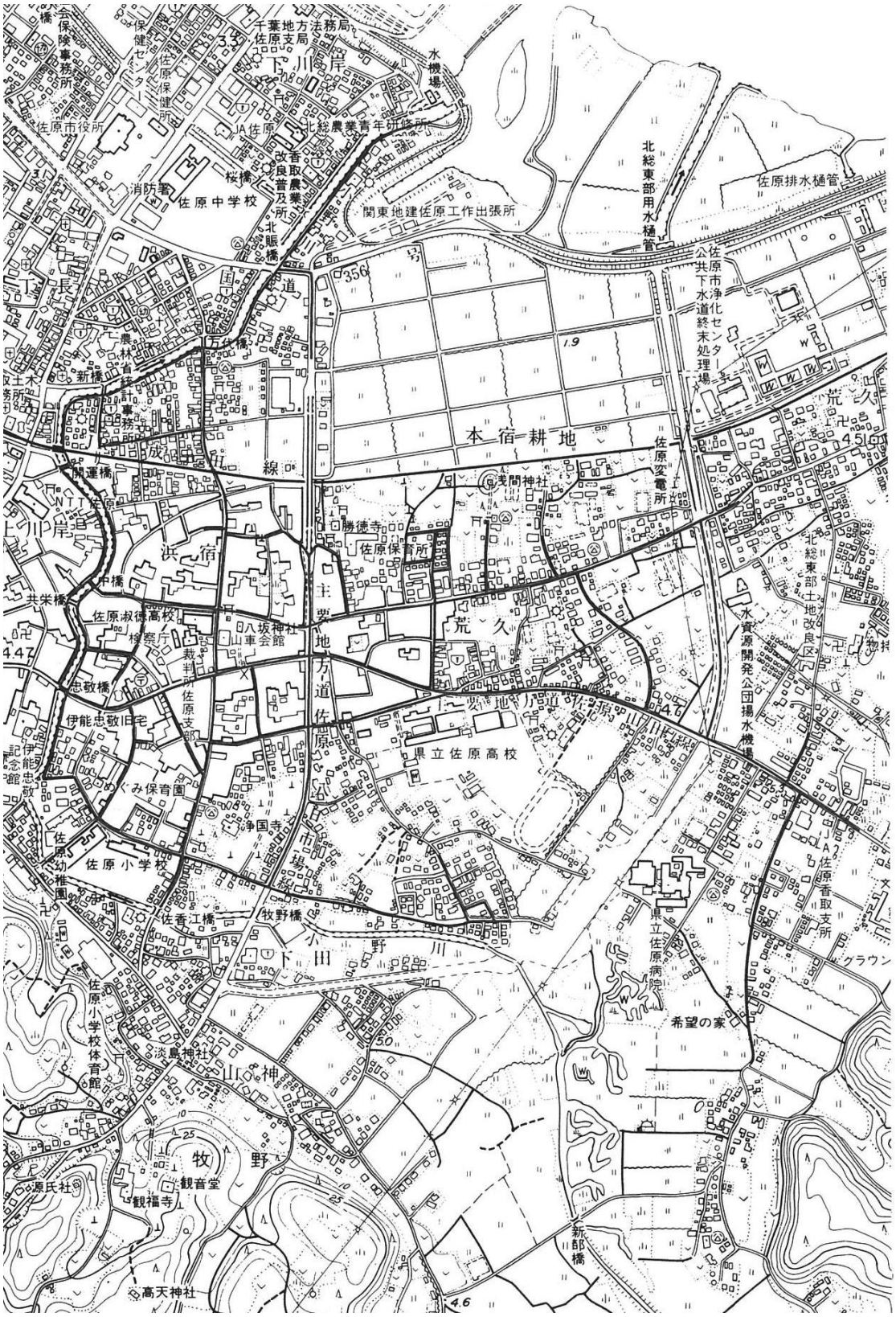


図 10 本宿における山車の曳き回しルート

出典：佐原市教育委員会資料

には新宿各町内の山車が出揃っていたという[10]。享保年間中には神社に所属する全ての氏子町内代表の集まり[11]である「惣町参会[12]」が当年の山車の曳き廻しの可否を決定する場となるなど、本宿・新宿それぞれにおいて山車祭が定着している。

付け祭の豪華さを競い合うようにして出発した佐原の祭礼は、その運営とそれに係る歳費が町人の自己負担によって賄われていたが、祭礼費割当という形で公開される祭礼の「町内美羅帳」は町内の社会集団の構成を暗示するものであった。

「土地家屋の所有、商工業者であれば、間口間数と店舗の位置、年間所得、家系・家柄、町内居住年数、町内役職やその経験などの評価に基づいて、「株」と呼ばれる町内における序列関係が決定され、その序列関係に従った「株割り」に基づいて、町内費や祭りの費用分担していた（林:1998 229)」

そのように負担が割り当てられている以上、江戸時代の佐原の山車祭は、財政的には旦那衆の存在なしには祭りが存在しえないほどであったが、町内の旦那衆にとっては擬似的な権力による示威を通じて町内に階層的な差別をつくり出すことができ、かえって好都合であった。それは、村落共同体とは異なる商家町であるがゆえに模索された序列付けの仕組みであり、後述するような年齢・役職階梯的な祭礼組織としての性格はこの時点で萌芽を見せていた（４章)。

一方で、実際の付け祭の現場においては、旦那衆は責任役や指揮役・監督役にとどまっていた。彼らは祭りの場において、自ら山車を曳き廻すことはなく、実際に山車の曳き廻しを行う若連は町内の鳶職や裏町の小商人、職人衆といった町衆が担っていた。たとえば、山車の運行を仕切っていたのは「チャキ」と呼ばれる若衆のカシラであったが、当時は町鳶の鳶頭が務める慣習になっており、旦那衆に良い見世場をつくりつつ、緩急自在に曳き廻しを行っていたという（清宮:1995 38-40)。そのために江戸期の祭礼においては、山車を曳く上で欠かせない曳き手の多くを裏町の小商人・職人衆が担っており、それを指揮する少数の旦那衆とそれを支える町衆という構造ができあがっていた。

このような佐原の山車祭は、小商人・職人衆にとって、形式上は神社祭礼に借りながらも、その日常的な鬱憤を浄化する場となりえており、旦那衆から職人や奉公人にもたらされた慰労の場であった。それは、役人による山車の曳出しの禁止に対してしばしば暴動が見られたことや山車・神輿の行列の一番争いから町衆同士の喧嘩がさかんに見られたことにも表れている。

こうした旦那衆の財力とそれを中心とした階層構造からなる山車祭の発生は、流通拠点としての佐原の繁栄の歴史と重なっており、経済特区としての町場の市場独占と自治的性

---

[10] 伊能権之丞文書によれば、その時点で８つの町内により山車が引き出され、番組（曳き廻しの順序）も定められていた。

[11] 山車を持たない町内を当然に含んでいるほか、神社総代と神主が参加して運営される。1887 年（明治 20 年）ごろまでは惣町参会によって、その年の山車の曳出しを決定した。

[12] 本宿においては６月１日、新宿においては８月１日に行われていたが、いずれも祭礼の行われる月初めに行われていた。

格の賜物であったということができる。このような山車祭の形から浮かび上がってくるのは、「田舎のムラの民衆神事」とは質的に断絶した「町場の旦那衆の自治装置」としての山車祭の姿である。町内の人びとは、山車の大きさや豪華さや曳き廻しの優美さを競い合うことの楽しさと興奮に魅了されることで、旦那衆の財力と政治力によって支えられた自町の特権的・自治的支配を再確認していた。このような「旦那衆の自治装置」としての祭礼は、今日われわれが伝統的とみなす曳山祭に広く共通している。

このような生業と結びついた祭礼の階層構造は、幕末から明治のはじめの社会経済的変化によって旦那衆という社会基盤を失った。そして、佐原の山車祭は町内の一般町衆によって集合的に支えられる祭りへと変貌していくことになる。

さて、山車祭は一般的に在方と分離した町場の発達を背景にもつ一方で、佐原にあっては、商家内部の組織ややり方だけでその経営が成り立つものでなかった。生活の手段となる生業としての商業は、物を売る主体に加えて、物の造り手である生産者と物の買い手である顧客があってはじめて成立するものであり、社会一般すなわち世間の評判や信用に依存するところも大きい。

この点について、林は佐原における商家研究を通じて、「生産者であるメーカー(製造元)や職人、仕入先である問屋をはじめとする同業者、とくに職商人の場合には原料の供給地でもあり、買い手にもなる農家、そして一般顧客に至る地域社会の多種多様な人間関係」から、商家が果たす社会的交換に関する言及を行っている（林:1998 191-210)。このような商農分離的な視点から佐原を分析する視座については、曳き手と囃し手が明確に離別されている祭礼の組織構造からも言及できる。

曳き手が山車を有する町内によって構成される一方で、神楽を奏でる囃し手は周辺農村の家の嫡男によって構成されていた。この佐原の祭礼組織構造は、19 世紀当時の山車を有する商家町と近隣の農村地域との関係性を直截的に反映したものであった。

囃子は、下座連（げざれん）と呼ばれる十人余りから構成される囃し手の集団によって山車の周囲の雰囲気に応じて役物・段物・端物に分けて演奏される。下座連の楽器編成と奏者数は篠笛５名、鼓５名、太鼓・大太鼓・ツケ各１名が基準となっている。下座連は、各町内組織を単位とする祭礼運営組織とは独立した任意団体であり、玉造・大戸・毛成・牧野・内野など、佐原周辺の農村部の集落を単位として構成されていた。佐原の山車祭においては、氏子町内の者は山車の囃子に加わらないという不文律が広く知られていたことに加え、下座師を継ぐのは代々、農家の長男に限られており、下座連として祭礼に参加することは集落において名誉なことであるとされていたと語られる。

「下座連を保有する佐原（旧佐原村）の周辺村々においては、代々佐原囃子の伝承は長男直伝とされてきた。その土地に残るものに伝承する伝承携帯は、概ね太平洋戦争以前までは守られていたようである（田井:2005 205)」

「かつての下座連は、佐原市街の周縁に分布していた。(……) 下座の人たちは佐原の山車に乗るためには佐原囃子ができなければいけないといい、猛練習をおこなったと伝えられ

ている。下座連のひとたちは佐原の山車に乗ることにかなり執着を持っていた。（……）山車を曳く側も囃す側も互いに技量や誠意に対して信頼関係を持っていた。このことは、祭りの期間だけではなく、日常的な生活においても互いに義理を欠くようなことがあれば解消されることになった（田井:2005 207)」

このように山車を曳き回す氏子町内と囃子を奏でる囃し手の分離は、川越氷川祭礼を始めとする他地域の山車祭礼においても指摘されているが（松平:1990 321-324)、佐原においては、当時の佐原の主たる産業である醸造業と周辺地域の穀倉地域の関係から説明される。「付け祭としての山車の引き廻しは、その年の農作物の豊凶に左右され、現在のように毎年行われたことはほとんどなかった。（……）近隣農村には商業の基盤のみならず、佐原の町の人々の日々の生活、特に毎日の食事においては、周辺地域からの行商に負うところも大きかった。それゆえに、収穫の出来不出来によって祭りの可否は左右されていた（大地:2012 16)」

商業地である町内の祭りでありながら、佐原の大祭では本宿における夏祭りが豊作祈願、新宿における秋祭りが収穫感謝の神事として行われてきた。佐原にとって周辺農村は醸造業の要であり、また糧食を支える存在であった。曳き手と囃し手が明確に峻別されながらも、共同で祭礼の実施を担当する集団として緊密な人間関係が構築されていたことは、佐原の町内が周辺の農村集落をその社会構造のなかに包摂していたことを示している。

２節　祭礼の時代的変容

江戸中期の町衆による生活共同をもとにした強固な伝統的都市祝祭として定着した佐原祭礼は、それぞれの時代的背景によって、その階層的な支配と閉鎖的な祭礼集団の編成が揺らぎ、形態やネットワークの変容を余儀なくされることとなった。その中でも一つに幕末・明治以降の近代国家への再編による社会的条件の変化、もう一つには戦後に生じた産業構造の転換や町内社会の瓦解は、それぞれ佐原の祭礼においても大きな時代的区分として役割を果たしたと考えられる。それは、２章で述べたような河北商業期、地域拠点商業期、商業停滞期の時代区分と並行して語られうるものである。

前節で述べた祭礼の始まりを河北商業期とし、本節では幕末・明治から昭和初期にかけての地域拠点商業期、戦後から佐原地区の辿った商業停滞期における祭礼の変容について記述していく。

	黎明期	成熟期	維持期
時期区分	江戸中期～江戸後期	幕末～明治・大正	昭和初期～平成
祭礼組織	旦那衆の寡占的運営	新興商人の参入 旧家旦那の没落 民主的運営への移行	他町曳き・女衆の一般化
時代的特徴	付祭りの華美化 江戸型山車の影響	運営方式の定着 歴史的停止点	観光資源への活用 文化財指定 （いずれも平成期）
地域の特徴	港北商業期	地域拠点商業期	商業停滞期

図 11　佐原の祭礼の時期的変遷

①「歴史的停止点」としての地域拠点商業期

幕末・明治期の近代産業化は、旦那衆の繁栄を支えた市場経済構造を急速かつ根本的に変容させることとなった。かつての町場の政治経済的中心を占めていた地主型の富商はそのポジションを失い、かわって在来産業の流通を受け持つ新興問屋がその地位を増していった。それは身分制の崩壊と商人層内部の交替を呼び起こすものであり、祭礼の決定権が町人一般に開かれただけでなく、既存の旦那衆と異なる新しい商人がリーダーとして地域に参入する契機となった。

しかし、今日まで受け継がれている佐原の山車祭の伝統を最終的に確定させたのは、明治期から大正前半にかけてのこの地域拠点商業期であることも確かである。われわれが「伝統的」とみなす佐原の山車祭のすがたは、この意味において近代以降に成立したものなのである。具体的には現存する山車のほとんどが幕末・明治初期から大正にかけて作られたものである点[13]、年番とよばれる町内ごとの持ち回り制度が成立した点、美羅とよばれる町内の共同出資によって資金が賄われるようになった点、さらに祭礼組織における役職の決定や風習の呼称・様式など、いずれもこの時期に確定している。

江戸中期に成立した佐原の山車祭の伝統の歴史的な停止点は、この明治・大正期に存在することが指摘できるが、このような傾向はしばしば全国の曳行祭に共通してみられるものであり、このように 20 世紀はじめの時期までに伝統型の祝祭が相次いで完成するようになった背景を松平は次のように説明する。

「19 世紀末以降、日本の地方行政は国家の行政権限を協力に浸透させて、中央統制を徹底させるとともに、旧慣にもとづく自助の伝統を継承し、古い共同体的な結合に基礎をおいてはじめて成り立つものであった。産業化の過程で地域社会が再編成され、国家の側からの官僚統制と行政からの除外という状況に対応して、地域社会の自衛のために共同をつくりあ

[13] 現存する最古の山車は、1822 年（文政 5 年）に制作されたものであるが、それを除くと全て 1850 年代の嘉永年間以降に制作されている。一方で、故障や町内の分裂から山車の新造を行った町内も散見される。

げる時期でもあった（松平:1990 330)」

比較的社会的に安定した江戸後期の近世都市のなかで開花したと考えられている伝統型都市祝祭は、古い日本的慣習のなかに起源をもちながらも、同時に産業社会の初期にあたって最盛期を迎えた社会的産物であり、その複雑な構造をよく体現するものであった。

たとえば、佐原において最も重要な地域集団は町内であるが、江戸時代には町内単位で道路・橋・木戸などの管理、祭礼・治安の維持・相互の生活扶助などの活動が行われ、それにともなう町内費の回収が行われていた。明治時代の市町村制の施行によってその機能の一部が行政組織へと移管されてもなお、祭礼を介して町内の公的な性格が保たれ続ける。1915年（大正４年）に旧佐原町は 33 区に区分されているが、全国的に町内会の結成が本格化していた時期であるにもかかわらず、佐原においては大規模な町内区域の変更はされず、町内の機能もそのままの形で存続しつづけていた。

また、幕末・明治期から昭和初期へと至る時期は、佐原が北総周辺に広大な商圏を有していた地域拠点商業期である。明治 13 年に振出・払出金の合計が佐倉・千葉に次いで３番目、振出金のみでは県下１位を記録し、明治 13 年（1880 年）に川崎銀行（後の三菱銀行）出張所、同 33 年に佐原興業銀行、大正元年（1912 年）に三協銀行（後の千葉銀行）が設立され、金融機関の進出のめざましい商業都市として伸長を続けていたが、そのような状況下において在来の地主型の旦那だけでなく、新興商人が新たに流入し、新旧問屋のなかで新たな序列争いが生じた。そのために、祭礼は新たな権力闘争の場として組み変えられていくことになる。それは、「美羅」と呼ばれる祭礼費の割当制度や祭礼における役職・年齢階梯的な組織構造がその様態を変える背景となる。

たとえば、昭和初期に自町内を中心に佐原囃子の調べに乗せて曳き廻す、「乱曳き」と呼ばれる曳き方が見られるようになった。乱曳きの途中で美羅と呼ばれる祝儀を受けると、御礼として家の前で山車を止めて手踊りを披露していた。そのため、手踊りを披露するために山車を止めることが頻繁にみられる。しかし、かつては大通りや川沿いなど一定の場所でのみ手踊りを披露し、その他の場所では止まらず曳き廻すのが通例であったという。

これは、祭りを運営するにあたって必要な資金を調達するうえで運営資金である美羅を町内にもらい歩くことが、祭り運営において必要不可欠となったことを意味している[14]。江戸期のように町内の少数の旦那衆をパトロンにすることが困難になったため、必然的に一般の町衆による共同出資の形式を取るようになった。

まず、誰がいくら寄付したかという事実は、美羅の貼り出しを保って公然に共有されていた。祭礼費割当という単なる金銭の割当だけでなく、各家当主の町内における位置を序列づけるものであった。

また、役職についても持ち回りや周囲の推挙によって運営されていくようになる。役職に

[14] 現在も美羅は金額の多いほうが表面の上のほうに目立つように貼り出されるようになっている。また、町内で商売をしている者は数万単位で美羅を出すことが一般的であるとされ、特に大きな負担が求められている。

就任するためには、祭礼費割当の大きさに加え、祭礼組織内での活躍が周囲に認められる必要があった。新興商人などは祭礼組織内で役職を獲得することで、旧家出身者の持つ「家格」を乗り越えようとしていた。その点において、旦那衆が独占していた特権的な祭礼は徐々に一般の町衆にむけて「民主化」されていったと解釈もできるが、明治から昭和初期にかけて北総一帯に及ぶ商圏を有した地域拠点商業の時代を迎えた佐原にとっては、半ば必然的に生じた権力闘争の場として祭礼が再構築されたものと理解できる。

②商業停滞期と共同体の瓦解

しかし、時代の流れは、山車祭の社会的基盤をさらに掘り崩していくことになる。全国の都市祭礼は戦後の高度成長期を中心とする生活様式と生活意識の近代的都市化の進行によって、近代的な日常生活の論理に包囲されていくことになった。中でも昭和中期以降徐々に商業停滞期を迎えていくことになる佐原では、時代的な交通手段に合わせて中心市街地の軸足が振り回され、中心商店街の空洞化が進んだ。昭和中期以降の商業停滞の時代は、佐原の「町衆の祭り」として成立するための社会的基盤を少しずつ蝕んでいくことになる。昭和中期以降を商業停滞の時代と位置づけるならば、今もなおその時代の渦中にあるといってよいだろう。

一方で、商業停滞期は、佐原の山車の曳き手をさらに開いたものへとしていく。現在の佐原の山車の曳き手は、子どもや女性から青年男性まで多様だが、15～20 歳程の一般女性は、かつては山車曳きに参加していなかった。その代わり、昭和 20 年代後半あたりまでは、芸者にお金を払って祭に参加し、踊りを披露してもらうのが一般的となっていた。。しかしながら、佐原経済の低迷と共に町に芸者がいなくなると、地元の若い女性たちが参加するようになり、現在では地元住民である女性たちやその関係者がこぞって参加して、山車を曳き手踊りを披露するようになる。そのため、手踊りの振付けにおいても戦前は日本舞踊が徹底されていたが、戦後はそれが簡略化され、バブル期に流行したディスコでの踊りの様式の影響を受けつつ、今日の手踊りが披露されているという。

また、祭礼に係わる担い手のうち、もっとも変化を遂げたのは前節でも述べた下座連組織である。戦前までは厳格に守られていた農家嫡男による伝承であったが、戦中の下座連の出征・戦死、戦後の農村の疲弊や産業化から来る農業離れを背景にその維持がきわめて困難な状況となった。戦前もっとも評価のたかかった玉造芸座連などは、長男直伝を厳格に守ったがゆえに、戦争直後、人手不足により活動を中止せざるをえなくなったという。終戦以後は佐原の町内の若者が下座連を志向するようになり、昭和 24 年に既存の下座連から指導を受けて発足した「佐原囃子連中」を皮切りに囃し手と曳き手の分離が実質的に解消されることとなった[15]。山車曳きが未だに氏子町内単位で管理されているのに対し、下座連は完全別個

[15] 夏は自町の山車祭に参加しながら、秋には下座として他町の山車に乗るケース（あるい

の任意団体としての性格を強め、地域に関係なく離合集散を繰り返し、平成以降の結成・解散も複数みられるなど[16]、山車町内に比べれば流動的に営まれてきたということが指摘できる[17]。

町内における「女衆」「娘連」の登場と下座連の担い手の離農化は、佐原の山車祭をそのままの形で維持し続けることが難しくなったために変化を余儀なくされた側面を持ちつつ、それまで男性町衆の強固な地縁によって独占されていた山車祭が町内女性や地縁を有しない担い手を緩やかに取り込むようになった時代性を反映するものであろう。

しかしながら、ここで留意すべきなのは女衆や下座連が祭礼組織の中核に至ることはないという事実である。「女衆」が山車に触れることは能わず、そのほとんどが家庭を持つ前に曳き手を引退していく。そもそも彼女たちが祭礼の現場において「女衆」「娘連」と呼称されることはない。下座連はそもそも町外の人間で構成されており、彼らは外の人間として山車祭に関わる存在であった。その意味において、近年みられるようになった「他町曳き」といった助っ人や推参的に参加する部外者の存在も同様であり、今日に至るまで佐原の祭礼組織はその周縁を流動的な担い手によって代謝していることが言えよう。一方で、それは佐原の祭礼組織の中核がいまだに旧態を保ち続けていることの裏返しであるようにも思われる。

３節　祭礼と観光政策

江戸中期の成立以降、地域の社会的背景の影響を受けながら祭礼としての形態を変化させてきた佐原の祭礼であるが、佐原が町並み保存とまちづくりに転じることとなった 90 年代は、祭礼にとっても一つの転機であった。それまでスル者もミル者も地区の人間にかぎられていた「町内の祭り」に多くの観光客が詰め掛けるようになったのである。それは、町並み保存と同様に祭礼が観光資源として積極的に位置づけられるようになったことを意味する。

その点において、1992 年（平成４年）に有料の観覧席が設置されたことは分かりやすい転機であった。駅北口の文化会館前広場は当時、各町内の山車が集合する地点となっていたが、その年まで山車曳き廻しの責任区役（弊台年番）を努めていた町内の提案により、有志

はその逆）がみられるようになった。

[16] 今日、現在活動している下座連としては、旧佐原市域のほか、千葉県では北東部の小見川町・神崎町・大栄町・多古町・東庄町・成田市・富里市・八街市、茨城県においては潮来市・鹿嶋市・麻生町・東町・桜川村・江戸崎町・新利根町・北浦町の 16 市町村 63 団体に及んでいる。

[17] もっとも、100 年以上の長きにわたって付き合いを有する山車町内と下座連もいくつかみられ、「名門」と呼称されている。町内側も「下座頼み」と呼ばれる慣習によって、毎年下座を迎え入れていることになっている。

の募金によって市内出身者をターゲットとした有料の観覧席が設置されると予想以上の成功を収めたという[18]。

そして、翌年の 1993 年（平成５年）に佐原市観光山車祭実施本部長であった経歴を持つ当時の佐原市長・鈴木全一と東関戸区長の小森光一の連名によって次のような呼びかけがなされた。

賑わいと文化の華ひらく佐原
賑わいルネッサンス「山車祭り」で町おこし（抜粋）

その昔、佐原は銚子と江戸を結ぶ利根川の「川の駅」として、総合的な一大物流都市、醸造品生産都市として、賑わい栄えてまいりました。(……) 幸いなことにも佐原には、他の地にはない素晴らしい自然風土と、超一流の文化財的資源が数多く残っております。これらが賑わいを創り出す「町おこし」の財産です。

その中で最も有力なものに、当地の風土と先祖代々が育んできた「山車祭り」という文化があります。(……) 佐原特有の関東一、いや日本一ともいえる文化的遺産が充分に認識、活用されているとは申せません。「繁栄と活力溢れる町おこし」の貴重な資源として活かしきれていないのが、現状といえます。また、「佐原の伝統の文化の良さ」の各地に向けたＰＲが不足がちであったことは、大いに反省すべき点と考えます。(……)

「日本一の山車祭りは佐原にあり」との名声を勝ちとり、この賑わいを創り出すため、市民参加型のお祭りの展開を考えております。飛騨の高山、秩父の夜祭りに負けない「佐原の観光山車祭り」をみなさんと一緒に創り上げていきたいと考えております。明治、大正、昭和初期と「賑わいと文化の華ひらく佐原」をつくりあげた先輩方に負けずに「日本一の山車祭り」を創り上げ、「賑わいルネッサンス」を成し遂げましょう（……）

（出典：弊台年番西関戸区『平成五・六・七年諏訪神社祭礼 弊台年番記録』）

同年には、各町内の祭礼経験者やその関係者を中心に構成された「佐原の大祭実行委員会[19]」が発足し、90 年代の祭礼の観光化に関する諸活動の主体となる。

また、これに歩調を合わせるように、1994 年（平成６年）に打ち出された佐原市観光振興ビジョンでは、80 年代に設定された旧来の観光振興でなく、地域の特性を踏まえた個性的で魅力ある観光のあり方が本格的に検討されるようになり、「伝統的な町並みの再生・復活・創造」と「祭りを活かす観光」が提案されるに至っている[20]。

---

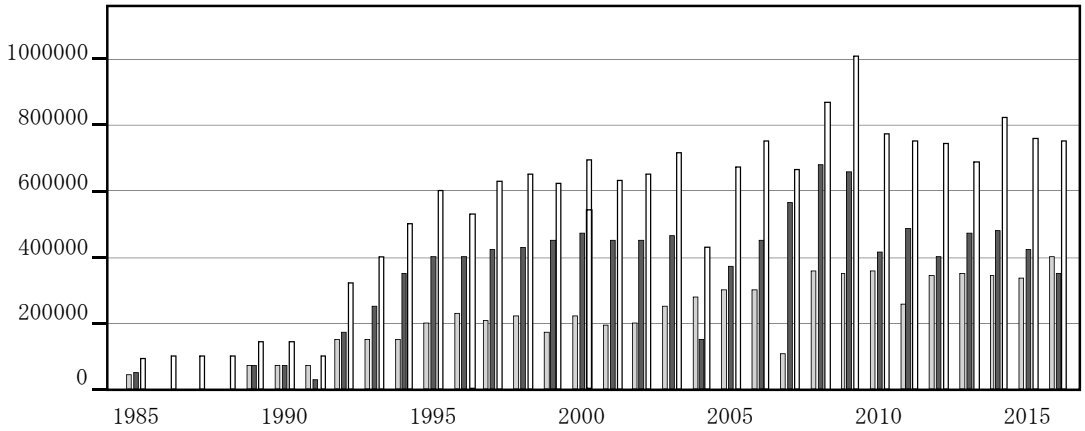
[18] この経緯については、田口（2009）に詳しい。

[19] その母体となったのは、水郷佐原山車会館の設立を目的に 1988 年の住民有志による集いであったという。

[20] 1984 年（昭和 59 年）にも佐原市観光振興基本計画が成立しているが、これは「水郷」「市街地」「香取神宮」の３大観光を一つの核とする提案であった。

こうした観光客誘致を想定し、具体的にさまざまな施策が取られるようになった。山車の曳き廻しを行う小野川筋と香取街道で電線の高さの張り替えによる大人形が立った姿のままでの曳き廻しの復活（田口:2009)、観光客用のイベント広場やトイレ・看板等の設置、金・土・日曜日への祭礼開催曜日の固定（清宮・小出:2003)、本宿・新宿と小野川の南北で分かれていた山車運行区域の相互乗り入れなどが進む。これらの活動が功を奏し、佐原の大祭の観光客数は何倍にも膨れ上がり、80 年代には数万人であった入込客数が 2007 年には 100 万人を突破するなど、祭礼を見る存在としての観光客が明確に認識されるようになる。かつては各町内の人間に囲まれていたに過ぎなかった山車が、今日見られるような身動きもとれないほどの観光客の群衆に囲まれるようになっていく。

図 12　佐原の大祭の観光入込客数の推移



※1984 年以前は千葉県商工部への報告がないため不明　　出典：佐原香取市商工観光課資料
※1986 年 -1988 年については合算のみ

2004 年（平成 16 年）には、「佐原の山車行事」として無形民俗文化財に指定され、佐原の山車祭が名実ともに「文化財」としての評価が定着した。近年は毎年数十万規模、夏秋合わせて 100 万人を超える入込み客を数える祭礼となっている。

増加する観光客へ無償ボランティアだけで対応することが困難になったため、「佐原の大祭実行委員会」は 2001 年（平成 13 年）にＮＰＯ法人「まちおこし佐原の大祭振興協会」として法人格を取得している[21]。しかし、大祭振興協会はあくまで数十名規模の有志によって構成されており、各町内の祭礼組織とは一定の連携を取りつつも、まったく別個の組織であることに留意する必要がある。むしろ、大多数の担い手はこれらの観光化を特段意識するこ

[21] 会員数 34 名（男性 29 名、女性 5 名)、法人会員 9 社によって構成されており、いずれも町内の祭礼経験者やその配偶者によって構成されている。①文化財としての山車の保存を図るために必要な調査研究事業、②佐原の山車祭の振興を図り賑わいを創出するための、お祭り広場の運営事業、③佐原囃子と文化財としての山車の保存、振興を図り、この文化を継承する人材の育成を図る事業等を主な事業内容として登録している。会員は通年で募集しているが、この数年間は特に新規会員は見られない。

とはない。それでも大祭振興協会の構成員が祭礼組織の有力者や行政関係者であることから連携そのものは取りやすくなっている。

このように 90 年代以降の観光政策の流れのなかで、佐原の祭礼の観光化は町並み保存と同時代的に展開された活動であった。しかし、前章で記述した町並み保存関係者と佐原の大祭関係者の二者の活動は活動開始当初から現在に至るまで、組織として連携しながら活動したことはなく、両関係者が互いに「（互いの活動について）あまり意識したことはない」と語られるものとなっている。

下図は、佐原地区のまちづくり組織の相関関係について整理したもの[22]であるが、祭礼関係者が商工会議所や第三セクターをはじめとする既存の商業関係者と結びついているのに対し、町並み保存運動のアクターは「考える会」を核として住民・学生をはじめとする任意団体・ＮＰＯが主な主体となっている。また、それぞれの活動に近い領域の市役所部署が強く関わっている。

この点について、白井は佐原のまちづくり政策の特徴を「町並み保存関係者と佐原の大祭関係者による独自活動がもたらした意図せざる相乗効果」であったと評価する（白井:2009 93）など、観光まちづくり研究の文脈においては成功事例として認識されている。いずれも活動も別個に生じたものではあるが、いずれも 90 年代に佐原において進んだ産業の空洞化や人口減少に対して危機感を持った地域住民が起点となっていたことが確認されていることに加え、双方ともに早期の段階で行政と結びついていたことが共通点としてみることができる。

しかし、上述したように祭礼の観光化自体は一部の篤志的な担い手によって推し進められたものであり、実際の祭礼の担い手である若衆や当役にとって必ずしも意識されるものではなかった[23]。祭礼の観光化はむしろ、「上の人たちが決める自分たちと関係のないこと」として捉えられている。

「観光客がたくさん来たところで、俺らにお金が入るわけじゃない。上の人たちは喜んでるみたいだけど（……）＊＊＊の祭りみたいに行政がお金出してくれるわけでもないし、山車を曳くお金は自分たちでやりくりしないとどうにもならない（Ａ町若衆ヒアリングより）」

「自分たちの町内でやっていくしかないから、（世界遺産になっても）デメリットしかないわけじゃん。上の方の人たちはありがたがるけどさ。世界遺産になったところで、伝統つないでいく人がいないわけじゃん。逆にいえば、世界遺産なのにさ、佐原の祭りって下手したら飲んだくれてるわけじゃん。それがいいのかって話でさ（Ａ町若衆ヒアリングより）」

「（ユネスコの無形文化遺産登録に関して）私らにとってめでたいんだか、めでたくないん

---

[22] 本図の作成にあたっては、東京大学工学部都市デザイン研究室佐原プロジェクトチームによる研究報告書（佐原プロジェクト:2007）を参照している。

[23] 祭礼の観光化に関しては「祭礼は神事である」との立場から反対意見も指摘されていたが、当時の町内の区長や佐原市市長が推しており、神社側もこれを容認していたことから次第に受け入れられるようになっていった。

だかよく分からないですけれども（……）どうやら世間様の注目が集まってるのは間違いないないようです（A町当役長スピーチより）」

年齢階梯的な構造を取る佐原の祭礼組織において、「上の人」とは即ち自町内における年長者、つまり古役や祭礼を退いた評議員を意味するが（時に地域の有力者や名家の関係者を示すこともある）、祭礼組織の実働を行う 40 代までの担い手の大多数にとって観光産業や地域振興は利害関係の薄いものであるだけでなく、ボランタリーな性格の強さからも特段意識されることのないものである。

本節では、佐原の祭礼が 90 年代に観光客を誘致する資源としての性格を獲得したことを述べた。このことは、町並み保存運動や観光まちづくりの文脈において、独自に生じたものでありつつも「相乗効果」を生み出した成功事例として語られる。しかし、これらの活動が、篤志的な担い手や引退した祭礼経験者、ボランティアといったアクターによって仕掛けられたものであり、祭礼組織自身や担い手のマジョリティによる強い要請によって生じたものではないことに留意する必要があろう。

第４章　祭礼組織と維持問題

前章では、佐原における祭礼がどのように成立し、その時代性の中でどのような変遷を辿ってきたのか、その具体的な特徴から整理を行った。佐原の祭礼は、典型的な都市祭礼としての性格を持ちつつ、佐原地区の変化に応じて、その運営方法や曳行の様式を維持、あるいは変化させていた。

こうした佐原の祭礼は強固な地域的結合を示すものであったが、近代前後の産業構造の変化を迎えたことでその結合がいっそう強化されていくことになる。その点において、神社と氏子町内の関係はその結合の要として閉鎖的に結びついていた。

しかしながら、そのような地縁の結びつきも近年の社会解体にともなって動揺しつつある。そこで本章では、山車町内の実質的な祭礼運営組織である若衆連合に着目し、組織と担い手の性質を明らかにするとともに、その維持がどのように営まれ、あるいは問題を抱えているかを記述する。

１節　祭礼組織の概要

前章でも述べたように、佐原の祭礼行事は、神輿の神幸を含めた神社の年中行事と山車の曳き廻しを行う山車行事に分けられている。そのため、神社の年中行事は氏子会が直営で行い、山車行事については氏子会会員の山車持ち町内に委任されているが、氏子会と町内は一部で重複しつつも基本的には別個の組織である。なお、氏子会は宗教法人法の規定によって、昭和 21 年に成立しているほか、各町内ごとに祭礼運営のための法人を設立されている。

図 13　曳き回しの山車行事と神輿の年中行事

山車を所有する町内は、夏に祭礼を行う本宿八坂神社においては 10 町内、秋に祭礼を行う新宿諏訪神社においては 14 町内[24]があり、それぞれが山車の曳き廻しを行っているが、祭りにおける山車の曳きまわしの順番を規定する番組や曳行に関する約束といった世話ごとについては、各町が持ち回りで担当する「年番」制度を採用しており（特に弊台年番と呼ばれる）、年番は「正年番（当該年度の年番役の町内）」「前年番（前年に年番を終えた町内）」「後年番（翌年年番を勤める町内）」に分かれ、各３年間にわたって山車祭を取り仕切っている[25]。年番となった町内は曳行の先頭を行くことができる一方、数百万に及ぶ従来の曳行経費と人員確保に加えて、弊台年番を担当することによる惣町費用の負担[26]、祭礼計画の策定、人員確保などを負担することになる。前章でも述べたとおり、山車運行の費用は自町居住者を中心に転出者・商店・周辺地域の祭礼組織からの寄付によって成り立っているが、担い手の減少によって一人あたりの負担が多くなっているのが現状である。

２節　山車町内と「他町曳き」

１節でも述べたとおりに町内単位で行われている佐原の祭礼であるが、山車はその曳行に多くの人員を要することから、いずれの町内も 20 代から 40 代男性で構成される若連の人数は 40～60 人ほどになっている。これに加えて曳行の安全管理や他町との連携を行う当

[24] １町内のみ、山車の損壊が著しいため、昭和 30 年以降は弊台年番から脱退している。
[25] 年番制度が確立したのは明治 10 年であるとされる。「新宿側では享保 6 年以降関戸町が常に山車の先頭を占めてきたことに他の町内の不満が高まっていったこと、本宿側では各町の山車が先陣争いを繰り返していたことなどの事情」があったという（水郷佐原観光協会:2013）。
[26] 本宿側は町内ごとに均等に負担している。（佐原市教育委員会:2001）

役が十数名、綱先を曳く幼稚園から小学校六年生までの子どもが数十名[27]、30 代までの女性で構成される女衆が 20～30 人[28]程度みられることから、一町内あたり 100 人～200 人ほどの曳き手によって曳行が行われている。さらに、前章でも記述した下座連が 10～15 名前後ほど、囃し手として参加している。

このように大規模な人員を動員する一方で、町内ごとの人口・世帯数・町内面積は大きく異なっていることが指摘できる。このことは町内の祭礼組織の運営に大きく影響を与えるものであり、今なお厳格な自町内制度を敷くことができる町内がある一方で、自町居住者が少数となっている町内も見られる。たとえば、下図は山車を保有する町内の人口構成を記したものであるが、E 町と F 町は特に規模の小さい町内となっており、両町内ともに曳行の実質的な運営組織である若衆連合が①同地区居住者ではあるが自町内に山車を持たない者、②山車を保有している自町内の祭礼に加えて同町内に参加している者、③市内他地区・鹿嶋・潮来・多古など周辺地域の居住者のいずれかの属性が大半を占めている。

基本統計	A 町	B 町	C 町	D 町	E 町	F 町
世帯（人）	263	388	457	190	19	21
人口（〃）	652	898	1174	445	57	47
年齢別人口比（%）						
－ 14 歳	11.9	9.4	13.7	7.1	8.7	14.8
15 歳 － 64 歳	54.2	58.0	57.1	57.3	47.3	40.4
65 歳 －	33.8	32.6	29.1	35.6	43.8	44.6
祭礼組織人数（人）	42	45	60	－	40	35
組織の構成員	ほぼ出身者	ほぼ出身者	自町のみ	ほぼ出身者	他町中心	他町中心

図 14 山車町内の世帯人口と祭礼組織人数

これに加え、若連組織には定着しないものの推参的に曳き手となる場合があり、④他地域の祭礼組織から臨時の「助っ人」として参加するパターン[29]、⑤観光客が地縁団体の仲介に

[27] 近年は少子化が著しく、町内によっては自町内以外の子どもを誘致する町内も見られ、E 町は近隣の幼稚園や小学校からも子どもの曳き手を受け入れている。

[28] 「女衆」の呼称を採用している町内は一般的ではない。祭礼組織における役割が細かく分類される男性と異なり、女性は特に組織化されずに「綱中」と呼ばれる曳き手グループに位置づけられている傾向が強い。ただし、町内によっては、実質的な祭礼組織である当役・若衆の下部組織として「女衆」による組織（名称は様々である）が結成されている場合もある。

[29] その年の都合に合わせて曳き手の人数を調整するケースがこれに該当する。たとえば佐原の大祭は例年、金曜日から日曜日にかけて行われているが、平日の金曜日のみ曳き手が少ない場合も多いため、この日だけ曳き手を補填するといったことが行われる。

よって曳くパターン[30]、⑥その他参加者の仲介によって参加するパターン[31]も存在する。これらの参加者は町内ごとの運営方針のちがいによって認められている部分もあるが、その推参的な性質からこれらの曳き手の継続的な参加はあまり認められず、全体人数と比較しても例外的な参加にとどまっていると指摘できる。また、自町内居住者の多い町内ではそのような助っ人を可能な限り排除しているケースも見られる。

このように流動的な参加者層のみられる佐原の祭礼であるが、山車・鉾を中心とした祭礼を行っている他都市の事例に関して、周辺地域へと広がる「山車文化圏」の指摘がなされている。吉田（2010）は、岸和田だんじり祭の祭礼組織において、同様にだんじり文化を有する他町内・周辺地域の助っ人から「他町曳き」を迎え入れることによって、だんじり文化の質と量が担保される「山車文化圏」の重要性を指摘している。

また、その他の論者によっても伝統的な祭礼の基盤である地域社会＝共同体そのものが瓦解している現状にあっても、岸和田は「幅広い参加様式を容認し、異質性や多様性を基本的に包摂する」現代の祭りとして、「年番を頂点とした寡頭制的なコントロールを達成して」おり、組織・団体・個人間で展開される競争・連帯の組織構造が成立していると指摘されている[32]（有本,2012）。

その点について、佐原においても、自町出身者による寡頭制的なコントロールによって①から③に至る祭縁的な助っ人、④から⑥に至る推参的な参加者を適宜組み入れてきたことはまちがいないであろう。しかし、佐原においては、その寡頭制的なコントロールの前提となる自町出身者・居住者の絶対数の問題がつきまとっている。

ここで留意すべきなのは、佐原の祭礼組織における自町居住者の存在が、他地域の事例以上に代替不能な存在となっているのではないかという仮定である。

Ｅ町・Ｆ町のように自町居住者がほとんどいなくなってしまった町内であっても、残る数人の自町出身者が多くを担うことでどうにか山車の曳行が可能になっている。しかし、Ｅ町の場合はすでに限界を迎えつつあり、「３日間のうち、２日間だけでもどうにかやっている」。しかし、それさえも続けることの難しさが予見されている。

Ｅ町の曳き手は***「曳き手だけなら外から連れてくればいいが、自分の町内のことをわかってる人間がいないと……。（……）みんな出てってしまうから町内の家はどうにも増えない***

---

[30] このパターンの多くは従来的な美羅代というよりも参加費・観光費としての金銭の授受が発生している。また、一つの町内が継続的にこのような受け入れを認めているケースは見られないという。

[31] 筆者は、町内の居住者の仲介を得て 2016 年 7 月に A 地区若衆連合に参加しているが、その際には事前に若衆のカシラへの許可を得て、寄合で挨拶をする必要があった。

[32] この点について、有本は祭礼研究が共同体の統合を結論とする「予定調和論的」な議論が展開されている批判をもとに、岸和田の祭礼組織を「新規参入者を取り込みつつ再編過程にある共同体」として、祭りの外部との関係、さらにはその内部における関係において生じるコンフリクトの諸相に注目し、競争、対立あるいは葛藤といった非調和的な関係性がどのような過程を経て成立しているのか、「関係態」に着目した分析を行っている（有本:2012)。

*ものだから」*と語る。

代々に渡って商業経営と家族生活の両方を営む氏子の家に生まれた自町居住者が参加することによって、佐原の祭礼は今なお単一共同体的な地縁によって成り立っているという幻想が維持されうる。そして、その意識が他事例に比べても強固であるあまり、地区の人口減少が実際の祭礼組織の存続に影響を与える段階になっても、他都市の祭礼ほど祭礼組織の選択縁化を進まずに今日に至っている[33]。それは、佐原地区の旧中心市街地が自己完結的・閉鎖的な土着集団でいようとするあまり、「うまく変化できずにいた」要因そのものであった守旧的な政治力とパラレルに語られよう。

この点については、5 章において、参加者のヒアリング・参与調査の結果から再度検討を行い、佐原の祭礼組織における自町居住者・出身者の意味について分析したい。

３節　若衆連合と年齢階梯構造

前節で述べたように祭礼組織そのものは年齢・役職それぞれにおいて階梯的な構造を取っている。それは、高校生以下 10 代男子が当てはまる小若[34]、40 代前半までの成人男性が属する若衆（ワケエシとも読む)、若衆を卒業した 40 代～50 代男性による当役といった区分である。若衆も当役もそれぞれに役職が存在しているが、いずれも年齢や役職の実績を積むことによって、祭礼組織内における等級が上がるという階梯構造を取っている。また、これらの担い手は完全に男性に限られており、町内の女性がそういった年齢階梯のレールに位置づけられることはない[35]。

このような年齢・役職階梯制度を取っている以上、中途から参入した他町居住者や周辺地域の曳き手がそのレールに乗ることは困難であり、自町居住者であっても「(祭りへの参加を）空けていた時期の長いと役職に就くのは難しい」ものである。「カシラとしての適性は長年見られているから、目立った失敗があると遠ざかる」と言う。そもそも祭礼組織内における人事は階層的上部が独占的に行うものとなっている。この点において、祭礼組織の階層

---

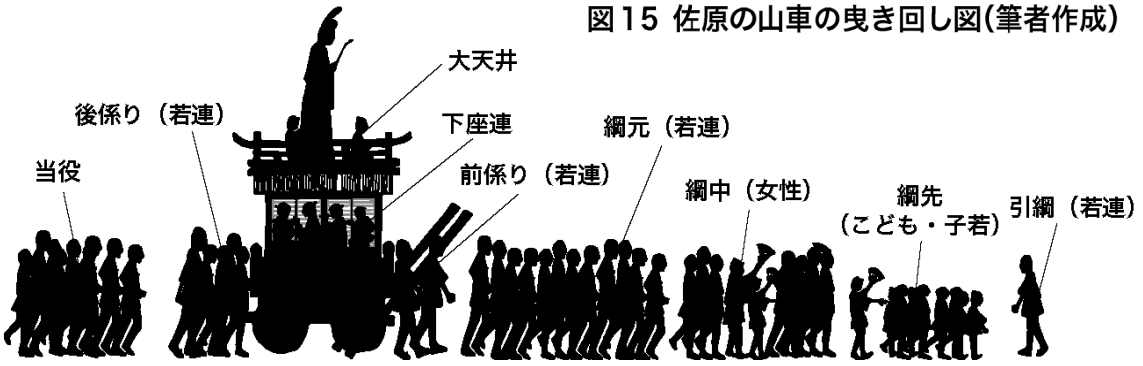
[33] 有末は、東京都中央区佃・月島の「住吉神社祭礼」の調査を行い、伝統的な祭りが新たな参加者を取り込んでいる形態について、祭祀組織を境界に「内部」・「外部」という関係を保った重層的構造になっており、祭礼の重層構造は月島における社会変動の結果を意味していると述べる。月島の事例は、都市祭礼において従来の祭祀組織の「外部」が発達したものと考えられる（有末:1983)。

[34] 小若そのものが祭りの運営に関わることはないが、一方で、若衆の準備組織という側面を持っている。町内における高校生以下の曳き手が急激に減りつつあるが、一方で生粋の自町居住者はそのほとんどが小若経験を経て役職持ちとなっていく。また、山車を持たない町内の出身者であっても小若から参加することによって、町内の階梯制度に乗っかる道を開くことができる。

[35] 「女衆」として 30 歳前後まで綱中の曳き手として祭礼に関わることはできるものの、多くの女性は曳き手としては引退する。一方で、自町居住者で夫や息子が祭礼に関わっている女性は美羅がけや祭礼準備などで祭礼に関わり続けることも多い。

的上部と階層的下部は完全な階層構造にあることが指摘できる。

図15 佐原の山車の曳き回し図(筆者作成)



	役職	年齢	性別	人数	祭礼・曳行役割
	評議員 賛助員	55～	男女	30～40名	曳き手としては引退 美羅（ビラ）掛けを行う
	当役	45～55	男のみ	10数名	町内の代表、年番役 曳かずに警備を行う
若衆連合	若頭/カシラ 役員	(40～45)	男のみ	(数名)	年長の若衆、運営の責任者 前梃子として山車を統括
若衆連合	若衆/ワケエシ	18～45	男のみ	40～50名	祭礼の運営の中心となる存在 山車や蔵・宿の点検・整備、 踊りの講習や記章配り等を行う 曳行では綱先・綱中・後方
若衆連合	助っ人	(20代)	男のみ	(数名)	他町・他地域からの助っ人 返礼として美羅・派遣を行う
	娘連・女衆	18～30	女のみ	10～20名	宿やお八つなど若衆の手伝い 曳行では綱中
	小若 子ども会	10～18	男のみ	10名以下	男子は10歳前後で山車に乗る 天井（オオテン）
		～12	男女	10名以下	

図 16 町内の祭礼組織の年齢階梯構造（筆者作成）

このような階梯構造は、佐原の祭礼組織が今なお伝統的祭礼としての性格を保持し続けている大きな要因となっている。そして、その成立は、祭礼がかつて町内の序列を決定する場として機能していたことに見ることができる。

前章でも述べた通り、佐原の祭礼は生活と生業に密に結びついたものであり、町内におけ

る社会的階層原理とリーダーシップの方式は祭礼組織のあり方を規定するものであった。かつての祭礼はその町内を「生きる」者によって担われていた。

前章で述べた町内費・祭礼費用の株割はまさにその具体的表現であって、町内の旦那衆にとって自らの威信を明確に示すものである。幕末から明治にかけて江戸時代依頼の在来産業の流通を受け持つ新興問屋が多く出現したことは、必然的に新興問屋と旧家大店の間で町内の権力闘争が展開されることにつながる。旧家大店も新興商人も町内の役職や地方政治の場にうって出て、町内と外部との橋渡しを勤めるなどの働きをもって自らを価値づけし、それぞれの威信を強化していく必要に迫られた。その町内の序列や等級を決める場として祭礼は機能していた。祭礼費の割当は、祭礼当日を境とする一期一年間にわたる町内の社会集団における各家当主の位置づけをランクづけるものであった。

その上で、佐原の祭礼は必然的に年齢階梯的な組織構造を取ることになる。子若、若連、当役、古役からなる年齢と役職の階梯は大正時代はじめには現在の形であったと言われている。なお、今日は古役を卒業した評議員がこれに加わり、祭礼組織の人事に大きく関与している。町内の住民はこれらの階梯を登ることによって、町内のリーダーとしての資格を有するか見定められたといってよい。とりわけ、農村部と異なって生産の共同性に欠けていた町内においては、町内有力者の後継者を育成するシステムとして必要であったといえる。

そして、このような年齢・役職階梯の階層構造は今なお佐原の祭礼組織に 100 年前に成立したときの形で残っている。しかし、氏子惣代の共同性を失った町内において、かつてのような権力闘争[36]は存在せず、その年齢階梯制度はあくまで祭礼そのもののために残存するものとなっているといえる。それでも祭礼における人間関係の影響が、現実の生活世界に波及することも当然みられる。

たとえば、当役・若衆単位、あるいは両者同席の元で頻繁に行われる飲み会は階層制度における上下関係が顕著に現れる例であり、①席の配置、②入場のタイミング、③挨拶周り、④店舗の指定等に至るまで、町内の慣習に則り、年長者・役職者絶対の原則の下で行われている。子ども会の解体[37]や町内商店の閉店、自町居住者の減少から失われつつある祭礼組織内の交流であるが、飲み会は昔ながらに飲む場である[38]。

---

[36] 権力闘争はしばしば町内の分裂・独立といった自体を引き起こしていたが、祭礼がきっかけで分裂するようなケースもある。特に厳格な祭礼組織であった関戸は 1935 年に「東関戸」と「西関戸」に分裂し、山車を真っ二つに分けている。「昭和 9 年 10 月 10 日、両区の正副区長、祭事当役等立ち合いの下、若衆百余名によって早朝屋台庫（やだいぐら）より引き出して、一切の飾り付けをし、正午の刻、諏訪神社前において、提灯はもとより前梃子、遣り梃子等に至るまで、一つ残らず真半分に分けられた」（清宮, 1995：37）

[37] 1980 年代までは、多くの町内において、町内児童によって構成される「子ども会」が結成されており、実質的に「小若」を形成する主体となっていた。子どもにとっては、日常的に遊びを行うグループであり、町内同士でソフトボール大会が行われるなど、祭礼の内外において地縁・人縁を強化するものであった。しかし、近年は町内の児童数の減少により、ほぼ全ての町内が「子ども会」を解散している。

[38] 一方で、このような祭礼の慣習の存在が「佐原の居酒屋が潰れずに保ってる」ことにつ

「バブルのときみたいに派手にやる風潮が強い。一回の飲み会で三次会、四次会まで当たり前のように飲むから、山車の曳き廻しと同じくらいお金を遣う（Ａ町若衆ヒアリング）」
「若い子であんまり（飲み会に）来ない子もいるけど、なんだかんだで町内の人間は皆来るんだよね。カシラとか役職付きは、まず飲み会に来ないとみんなに信用もらえないから（……）余所から手伝いに来てくれる子が飲み会に参加することはあまりない。一次会だけで帰る人もいるけど多くはないよね（Ａ町若衆ヒアリング）」
「Ａ町に比べれば、うちの町内（の飲み会）はまだフランクにやってる。けど、うちも飲み会はいろんなところ行くよね。同じやり方を踏襲している。町内の変えていい部分も変えていけない部分っていうのがあって。難しいなあ。基本はさあ、毎年同じことやってるからさあ。若い子もさ、辞めてっちゃうよね。（……）結局はさ、友達がいなくなっていきづらくなっちゃうと辞めちゃうよね。辞める子も多いんだよね。忙しいからトラウマみたいなのもあるだろうけどね。まあ、こういう狭い町だから仕方ないんだけど（Ｅ町・Ｍさんヒアリング）」

伝統的な祭礼を重んじる担い手にとって、祭礼は「いかに見栄を張れるか」の世界であった。明治期の佐原の祭礼において旦那衆が評判の芸者を招いては、自町内の山車の前で舞わせていたことはステイタスであったが、今なお「どれだけ提灯を揺らさずに曳けるか」「のの字廻し[39]を止まらずに何回できるのか」という美意識は、いまなお地域レベルで共有されている。そのような美意識や価値観を保つため、組織内で諍いや衝突が生じているのも確かである。

これらの守旧的な上下関係や奢侈的な風潮に馴染めずに祭礼組織から抜けていく担い手も少なくない。現在、祭礼組織の核をなす 40 代以上の若連・当役・古役はふるい落としの中で祭礼組織に残り続けているが、市外への進学・就職を迎える若年層にとって祭礼準備における徹底的な上下関係に追従し続けるのは、より難しい状況を迎えており、90 年代以降の人口転換の中で特に顕著に表れている。

次節では、具体的な町内組織の事例に着目し、祭礼組織の人口構成の具体的な変化について記述する。

ながっているという。例えば、祭礼前後になるとその年度の美羅がけで寄付を募った居酒屋で順繰りに飲み会を行い、地区の店舗をはしごしていく。昭和より営業を続けている居酒屋のほぼ全てが祭礼組織を定期的な顧客としている。

[39] 一般的な曳き廻しに対して、技を競うとともに、最大の見せ場としての特別な曳き廻しである「曲曳き」の一つであり、「３回廻し」「２回廻し」「１回 1/4 廻し」「１回廻し」とそれぞれ回数分だけ、梃子尻を中心に「の」の字を描くように人力で四つの車輪を回す。３トンに及ぶ山車を扱う関係から平成以降は保安当局によって指定されている。一方で、観光客に対する見せ場の一つになっており、大広場と大観衆の場にあって「スリルとスピードが求められるようになった」という。

４節　Ａ町内の祭礼組織

Ａ町は、自町内に山車を抱える町内の一つであり、夏に曳山祭を行う本宿側に属している人口・世帯数ともに平均的な町内である。祭礼の歴史は特に長く、数ある組織の中でも仕来りや習わしには厳格な町内の一つとなっており、その厳格さは、例えば「自町居住者、しかも出身者でなければ、（若衆の）カシラや当役長にはなれない」と語られることに表れている。昭和 40 年代生まれの多い町内だったこともあり、その前後の世代にあってはほぼ自町出身の居住者によって曳き回すことのできる町内であった。詳細な年齢別人口は公表されていないが、町内住民 652 名のうち、15 歳-64 歳の男性人口は 150 名前後であると考えられ、実際に祭礼の運営を行う若衆と当役に加入している割合は３～４割であると考えられる。町内における自営業者数は他町に比べると少ない。また下表は、Ａ町内の若衆連合の人口構成とその属性をまとめたものである。

行政区分	男	女	計	世帯数	15 歳未満	15-64 歳	65 歳以上
Ａ 町 ①	15	21	36	14	2	20	14
Ａ 町 ②	12	12	24	11	2	8	14
Ａ 町 ③	64	65	129	53	13	60	56
Ａ 町 ④	90	70	160	60	29	86	45
Ａ 町 ⑤	159	178	337	132	57	169	111

表 17　Ａ町における人口構成（行政区別）

A町の若衆の年齢構成と属性

	年齢	出身	現住地	Uターン	職業	勤務地
(1)	47	県外	A		公務員	銚子
(2)	46	A	A		会社員	市内
(3)	46	A	A	○	-	
4	45	A	A		自営業	
5	45	A	A	○	会社員	市内
6	45	A	A		-	
7	45	A	他町内	○	会社員	
8	44	-	A		会社員	
9	43	A	A		自営業	
10	43	A	A	○	会社員	
11	43	A	A	○	会社員	
12	43	A	A		自由業	市内
13	42	A	他町内	○	会社員	
14	41	A	A		会社員	
15	41	A	A		-	
16	41	A	A	○	自営業	市内
17	41	A	県内他市		会社員	
18	40	A	県外		自営業	都内
19	40	A	A	○	自営業	市内
20	40	他町内	他町内	○	教師	市内
21	39	A	A	○	専門職	市内
22	36	A	A		会社員	
23	36	-	A	○	会社員	
24	35	A	A		会社員	
25	35	A	県内他市		会社員	都内
26	34	A	A		会社員	
27	31	A	-	○	-	
28	31	他町内	他町内		-	
29	30	A	A	○	会社員	
30	30	他町内	他町内		会社員	
31	30	他町内	県内他市		会社員	
32	30	A	A		会社員	市内
33	30	県内他市	県内他市		会社員	
35	28	他町内	他町内		会社員	
36	27	A	A		会社員	
37	26	A	A		会社言	
38	24	他町内	他町内		専門職	
39	24	他町内	他町内	○	会社員	
40	23	A	A		教師	我孫子
41	21	A	県内他市		会社員	市内
42	20	A	A		学生	我孫子

注：括弧は現在当役であることを示す

この表からは、A町の祭礼組織が 40 代を境界にして担い手の性質が転換している傾向を読み取ることができよう。A町の若衆連合においては、40 代以上の担い手のほぼ全員が自町出身者かつ居住者であるのに対し、20 代から 30 代の担い手は他町居住者が過半数を占め、自町出身者は市外に居住するものも含めて、その関わり方が多様化しているという事実が指摘できる。前章でも述べたように、女衆や比較的地縁を持たない担い手の祭礼参加は緩やかに解禁されてきたが、一方で中心となる担い手との差異が目立つのも確かである。

そこで、A町の若衆連合に参加している居住者――つまり「他町曳き」の属性について考えてみることにする。

A町の祭礼に参加する他町居住者の多くは、秋の祭りで自町の山車を曳き回す祭礼経験者であり、いわば夏と秋で「両面曳き」をする存在である。佐原においては、夏と秋にそれぞれ同規模の祭礼が行われていることもあり、7 月には新宿の町内から本宿の町内へ、10 月には本宿の町内から新宿の町内へと曳き手が加わる「他町曳き」が頻繁に見られている。また、曳き手だけでなく、下座連として他町に参加する場合も多い。

こういった「他町曳き」は町内の制度に位置づけられているものではなく、基本的には個人的な縁――同級生の町内に参加する場合、親しい友人に誘われて参加する場合など――によって発生するものである。そのため、特定の町内同士で互恵的に交わされる性格は必ずしもないが[40]、いずれの町内においても「他町曳き」が一定数見られることもあり、結果的に「他町曳き」という形で周流的に遣り取りを行っているといえる。また、曳き手の少ない町内が「他町曳き」を積極的に招くことによって、人数の少ない町内であっても曳き手の適正規模を維持することができる状況に繋がっている。

一方で、彼ら自身は自町内においては年齢階梯のレール上にある「祭礼エリート」でもある。自町内に山車が優先される中でも、夏と秋の祭りの双方に参加する「他町曳き」はそれだけ祭礼に熱中していたり、深く関与している存在であるが、そのために自町内の祭礼組織において役職を担う存在として期待されている蓋然性も当然に高い。また、2 つの町内を掛け持ちすることは金銭的、体力的にも負担の重いものである。

そのため、彼らはやがて自町内の祭礼組織に専念せざるをえない。その年限は様々であるが、30 代半ばまでにはその多くが辞めていく。それは暗黙の了解であり、「他町曳き」自身も自町の祭礼組織において、そのように「他町曳き」を迎え入れていることを意味する。

「自町内で役職に就くような年齢になったら、他の町内（への参加）は自然と辞めていく（……）役職に就くと町内の顔になるわけだから（……）両方ずっとやるっていうのはルール違反というか（A町・Nさんヒアリング）」

「祭りの期間中は、朝から晩まで山車を曳きっぱなしなわけだから、いつまでも（掛け持ち

---

[40] ただし、「他町曳き」の存在によって特定の町内同士で人の遣り取りが活発になるケースもある。A町においても、F町に「他町曳き」として参加している者が多かった関係からF町からA町を手伝う事例があったという。しかし、近年はF町内の担い手が少なくなり、そのような遣り取りは見られなくなった。

を）続けるってのは難しい。（……）飲み会とか色々バッティングもする。（祭礼参加者ヒアリング）」

そのために「他町曳き」は、祭礼組織のなかでも「周縁」に位置せざるをえない担い手であり[41]、同時にやがて祭礼組織を去っていく一時的な担い手である。このような観点からも、佐原の祭礼組織における自町居住者による「中心」の寡占は未だに保たれ続けている。A町においても 40 代以上に他町居住者がほぼ見られないのは、それを貫徹していることの証左であろう。

一方で、その事実はA町の祭礼組織を継続していく上での課題を浮き彫りにする。

現時点で、44 名の担い手から構成されるA町内の若衆連合は、年齢階層としては下図のように構成されている。総体的には、若くなるにつれて担い手人口の漸減傾向があるようにみえる。しかし、自町居住者は年齢によって偏在しており、自町居住者に限ると 30 代以下の担い手は隔年ごとに若干名見られるに過ぎない。また、その若年層も祭礼組織を参加しつづけるとは限らない。

上述したような上下関係の厳しさ、金銭的・体力的負担の大きさ、都市的生活様式とのミスマッチから若年層離れは進んでおり、担い手自身もそのことを認識している。

たとえば、祭礼は当日の三日間のみならず、その準備に平日や土日両方を費やすものであり[42]、会社員が大半を占める若年層にとって逐一参加することは難しいものとなっている[43]。美容師の資格を取得してA町にUターンしたX氏は、美容師という仕事の性質から土日に休むことが難しく、若連の寄合や準備に顔を出すことができなくなってしまったために、そのまま若連組織を脱退してしまった。一方、現在のA町の若連のカシラは会社員であるが、平日に行われた山車のメンテナンスのために会社を早退し、スーツ姿のままで山車蔵に駆けつけていた。しかし、A町のカシラのように平日の昼間に祭礼準備のために休みを取る者は稀ではない。山車を蔵から出し入れするためには最低でも 10 人程度の人手が必要であるが、そのための人員を確保するため、比較的人口の多いとされるA町であっても苦心しているのが現状である。

当然のことながら、祭礼は当日で完結しているのではなく、その前後に行われる準備や寄

---

[41] 従来の祭礼研究では、「他町曳き」を「他町における祭礼構造の周縁的立場とのあいだの往復経験を通して、それぞれの祭りの運営方法や曳行技術と犯してはならないプライドの存在を再確認する契機」と捉えている（吉田：2010）。

[42] 祭礼の前には、蔵から山車を出して大人形や飾り物を載せる作業、梃子・鍋鉉・提灯といった備品の調整、ネジリや半纏の調達・製作といった山車に関する作業だけでなく、曳行ルートの打ち合わせや諸注意の確認、記章配りと呼ばれる町内への挨拶回り、子どもを始めとする手踊りの練習など町内全域で行うものも多い。祭礼の後も虫干しや掃除、ハンマー（車輪）の交換といった点検やメンテナンスが行われるが、参加者の多くを市内居住者、その中でも自営業者やフリーターに頼っているのが現状である。

[43] 以前は、周辺地域に就職した佐原出身者は「祭礼のときは休む」ことで有名であり、会社もその旨を承知していたと言う。市内であれば、現在も祭礼期間中は融通を利かせる会社も多いが、そもそも市内で職を得ている者が少数に留まっているのが現状である。

合、さらには祭礼の外における日常的な人間関係も含めての祭りである。寄合や準備に参加できない事情や状況について担い手同士で相互に理解はしつつも、誰しもが多少の無理をしながら駆けつけている以上、「自分だけが寄合や準備に参加できないこと」を申し訳なく思い、祭礼組織に対して足が遠ざかっていく――祭礼組織をフェードアウトしたX氏は、その後他地域へと引っ越している。

A町の祭礼組織の維持については「今すぐどうにかなるものではない」と当事者たちは語っている。

「人だけなら外から呼んでくればいいんだ、やりようはある（A町祭礼参加者ヒアリング）」

飲み会の場で若連が次のようにも発言している。

「観光客にだって綱を曳かせればいい。他の町内もやってるじゃないか（……）さすがに山車には触らせてあげらんないけども……（A町祭礼参加者ヒアリング）」

今年の祭礼もA町は朝から晩まで三日間、山車を立派に曳き廻して見せた。鹿嶋地区から臨時の助っ人を数人招き入れ、筆者のようなイレギュラーな助っ人や以前から付き合いのある「他町曳き」も含め、若衆だけで総勢50人前後の人員が揃った。

しかし、その助っ人の手配をしたのは自町居住者である[44]。数年に渡って祭礼に参加している「他町曳き」も筆者のようなイレギュラーな助っ人も自町居住者が招き入れたものである。しかし、招かれた彼らはあくまで周縁的な存在である。そのままA町の祭礼に残り続けるケースはきわめて少なく、A町にとってもその前提で招き入れている。

このように自町居住者・自町出身者を中心に成り立っているA町の祭礼組織であるが、表18でも示したように30代以下の世代において、その絶対数は間違いなく先細っていかざるをえない。その時、A町の祭礼組織は何かしらの形で変化が迫られることになる。

それでは、十分な自町居住者を確保できなかった祭礼組織はどのように対応していくのだろうか。

その点において、もともと町内における人口の少なかったE町やF町は、このシナリオがつとに進んだケースといえる。両町内とも30人～40人程度からなる若衆連合を組織しているが、近年は自町居住者が数人のみという状況を迎えている。

もともと町内人口が少なかったために従前から他町や周辺地域の出身者が役職に就くことを部分的に認めてきた両町内であるが、人口の少ないにもかかわらず山車を保有することができたのは、両町内とも「大旦那[45]」と呼ばれるような豪商を抱えていたからであり、

---

[44] その返礼として、鹿嶋J町の祭りの際にはA町内の若連から美羅がけによる寄付を行っている。

[45] 一般的には、旦那衆は「表通りに間口を広げる商人」のことであり、「町人には屋敷地を所持し表間口割の冥加金を分担する家持と公役や町役をいっさい負担しない地借や店借の二つの階層に区分される（……）このうち、正規の町共同体の構成員は前者である旦那衆に限られ」る（岩本:1985）。しかし、佐原の商家研究を行った林はこの点につき、「佐原においては在郷町としての性格上、家持だけでなく、土地を借りてその土地の上に店を構えている地借層を含めた「本町人」のことを「旦那衆」と呼んでいた」とする。彼らは

その家の出身者が今なお祭礼を維持する後ろ盾となっている。しかし、そのような「大旦那」の家でさえも、その世代交代によって業種転換や跡継ぎ問題を抱えている。

100 年以上にわたって山車を曳き続けてきた両町内であるが、近年は他町のように三日間を引き続けるだけの人員・資金を確保するのが難しくなっており[46]、２日間のみの参加や規模の縮小や運営形態の変更を余儀なくされてきた。中でもＦ町は来年 2017 年度の参加を見送ることを検討している。全日程の不参加ということになればＦ町にとっても初めての決断となるが、年番を務め上げた直後ということもあり[47]、再来年以降の祭礼を見すえてそう決断せざるをえないという。

５節　小括――祭礼組織の曲がり角

本章では、佐原の祭礼組織がどのように成り立ち、時代的な曲がり角に来ているのかを明らかにした。

佐原の祭礼組織は、伝統的な曳行祭によくみられるように、役職・年齢階梯の階層制度をとることで自町内の序列や権力関係を決定する場として機能していた。それは、佐原地区がかつて商業を中心に栄えた在郷町であり、農村集落のような共同的な生産によって権力構造を作りだすことができなかったがゆえに、代替的に階層原理を生み出す手段として選択されたものと理解できる。

しかし、20 世紀の産業構造の転換の中で、そのような権力関係の前提となっていた共同体は瓦解していく。周辺地域のような外部資本による開発路線を取らなかった佐原は、結果的に周辺地域の商圏の中心としての性格を失い、産業の空洞化が急速に進む。このように共同体が「形骸化」してもなお、佐原の祭礼は単一共同体的な氏子町内によって営まれるものとして在り続けようとした。

「町寄合」や「参会」と呼ばれるような旦那衆の会議を開き、村内の運営方針を決定していたが、こうした各町内を束ねるような代表者のことを指して「大旦那」と読んだという（林:1998 226)。それは、利根川水運を背景に栄えた商家、「西の灘、東の佐原」と呼ばれた醸造業の経営者や周辺地域の多くの農家を抱えていた豪農地主が当てはまっていた。これらの老舗の当主は、今なお佐原の名家として名指しされる存在である。

[46] 3 日間の山車曳きには一般的に 200～300 万円の費用が必要となるが、その中でもっとも高額となるのは飲食代である。総勢 100 人もの参加者が朝からばんまで飲み食いし、酒を飲む。実際の参加人数よりも多い食事・飲料を準備し、余らせて廃棄することが望ましいとされる。万一、食事や酒が足りないような場合は、場が「しらける」といって歓迎されないという。(塚原:2009)

[47] その背景に、Ｅ町が本年度まで弊台年番を担当していたことが挙げられる。３章でも記述したように、年番は山車曳行の先頭を行く名誉に浴する一方で、弊台年番を担当することによる惣町費用の負担・祭礼計画の策定・人員確保など、例年に比べても重い金銭・人員的負担を背負うことになる。しかし、年番は明治以降各町内が守ってきた取り決めであり、数十年に一度の名誉でもある。ゆえに年番の回ってきた町内にとっては「無理を押し通してでも遣り切るしかない」ものとなっている。

その上で、今日に至る自町居住者・出身者を前提とする佐原の祭礼組織の構造を分析し、A町の事例を中心に祭礼組織の「中心」と「周縁」が強固に隔たっていることを示した。しかしながら、90 年代以降の恒常的な若年層流出から、自町居住者・出身者の絶対数の先細りが想定される。

人口規模の少ない町内においては、既に自町居住者を前提とする組織運営が困難になっているが、その中でも老舗の当主やその息子が中心的な役割を担い続けることによって、辛うじて従来の規模を維持しているのが現状である。

規模の差こそあれ、どの町内も自町居住者・出身者の減少に関して同様の課題を抱えており、現在のような自町居住者・出身者を前提とした組織運営から転換せざるをえず、その点において、佐原の祭礼組織は将来的に一つの曲がり角を迎えることになる。

第５章　「維持」される祭礼と主観的意味

１節　祭礼組織とUターン者

自町出身者を核とする担い手によって単一共同体的な山車の曳行を維持してきた佐原の祭礼であるが、いずれの町内においても世代交代の中で、自町出身者の存在が疎らなものとなりつつある。そこには、地域の若年層にとって社会経済的条件から佐原を選ぶことの難しさが横たわっている。実際の社会移動・居住地選択が、進学・就職・結婚といった様々なライフイベントに紐付けられる傾向がある以上、実質的に都心部への通勤・通学圏外に位置する佐原は、当人の資質・キャリアに見合った就職先を選ぶ際の制約が大きい町とならざるをえない。

しかしながら、一度は地元を転出しながらもUターンによって佐原を「終の棲家」に選ぶ者もある。それは全体から見れば少数ではあるが確かに存在しており、そういったUターン者が自町内の祭礼に関わり続け、祭礼組織を支え続けるケースもある。たとえば、E町に二人しかいない自町居住者の若衆のうちの一人、Mさん（久保木さん）もその一人であり、本年度から若衆組織の副カシラに就任しているが、同町の出身者であり、東京都心に就職したのち、家業を継ぐために佐原へとUターンしたＴさんもMさん同様に若衆のカシラを務め上げた。

Ｔさんの実家は、いわゆる「大旦那」であり、Ｔさんは「屋号だけは絶やさぬ」ように言われて育ってきた。しかし、Ｔさんが大学生になったころ、Ｔさんの父親の代で実家の畳屋は廃業してしまう。

「うちも子どもが出来て家業が継ぐかと言うと、たぶん嫌だろう。家業も変わってしまったから（……）僕なんて小学生の頃から祖父に「お前は跡取りだから」と言われて育ってきた。仕事は継がなくていいから、屋号を絶やさないことだけは……（Ｔさんヒアリング）」

高校卒業後そのまま職を得て佐原に住み続ける、あるいは大学進学を機に地元を離れるもいずれかの時点で佐原に還流するというライフコースのうち、後者の存在は少数ではあるが、Ｔさんのようにとりわけ強い地縁・人縁＝選択できない縁の中で地元に戻っていく。そして、いずれの事例においてもＵターン者と祭礼組織との関わりがみられるが、それはある意味で地縁・人縁の強さを象徴的に示しているものといえる。

では、このように地元に還流しながら祭礼組織を支えているＵターン者にとって、祭礼や自町内の存在はどのように受け止め、彼らの生の中で意味づけられているのだろうか。それは主観的ではあるかもしれないが、彼らを始めとする地域の担い手にとって「祭礼」を続け、佐原に生き続ける意味を明らかにすることにつながると考える。

本章では、大学進学にともなって一度は地元を転出しながらも、家業を継ぐために地元に還流したＡ町のＮさんのライフヒストリーを記述する。Ｎさんもまた親兄弟ともども祭礼に関わってきた家の出身であり、Ａ町の祭礼組織で若衆を務める担い手の一人である。

ＮさんのＵターンも決して平坦な道のりではなかった。父親の体調不良をきっかけに前職を辞めて家業を継いだものの、前述のＴさんと同様、佐原の自営業をめぐる状況は厳しい状況にあった。また、還流以来今日にいたるまで自町内の祭礼を支え続けてきたＮさんは、前章で述べたＡ町の 40 代と 30 代の谷間の世代にあたり、「同じ年代にＮの代わりがいない」ことが自他ともに認識されている。Ｎさんが継いだのは、町内で営まれてきた家職としてのＮ家だけでなく、祭礼を支える氏子町内としてのＮ家でもあったのである。

２節　Ｎさんの事例分析――Ｕターン者と祭礼

（１）Ｎさんの家業とＵターン

Ｎさんは、1977 年（昭和 52 年）に旧佐原市のＡ町で生まれた。Ｎさんは二人兄弟の長男で、年齢の離れた弟が１人いる。実家は祖父の代から始めた農業資材を扱う卸と小売業を営んでおり、生まれたときには父親が継いでいる状況であった。

「（Ｎ家の家業は）うちのおじいさんがこれから農業の方でビニールが儲かるという話で、ビニール屋を始めた[48]。おじいさんは麻生の出身だったかな、実は婿入りだったから。（……）おじいさんの前はずっとお菓子屋さん。ずっとここでお菓子屋さんをやっていた。（昭和５年の古地図を指差して）ほら、ここにも載ってるでしょ。ビニールをやりだしてから、ここでお菓子屋はやっていないけど、別の場所で親戚がお菓子屋を続けていた。並行していた時代があった。今は畳んで、ビニールの方だけだけども（Ｎさんヒアリング）」

Ｎさんは地元の進学校を卒業したのち、大学進学を機に佐原を転出、卒業後は都内の石油商社に就職しているが、Ｎさんは家業を継ぐタイミングで実家へと戻っている。

還流のきっかけはＮさんの父親の体調不良であった。祖父の代から農家を顧客とした農

[48] 戦後まもない昭和 27 年（1952 年）のことであったという。

業資材の卸と小売を行ってきたＮさんの実家であるが、Ｎさんの父親が業務を続けることが困難になったことが知らされたのは、Ｎさんが石油商社に就職してから 4 年経ってからのことだった。

「(26 歳の）12 月だったかな、佐原に戻ったのは。親が体調崩して、お前戻ってこないかって話になった。（……）前職もだいぶ大変だったから戻ってもいっかって気分になった。当時も朝から晩まで働いてたから。（……）まあ、今でも思うよ、もし佐原に戻らなかったらもっとふつうの人生だっただろうね（Ｎさんヒアリング)」

Ｎさんが継がなければ、家業は潰れてしまう。一方で、理系で地方の国立大学に進学したＮさんにとって、佐原に戻ることは自らの大卒としてのキャリアを宙吊りにすることを意味していた。

通学圏としての厳しさから佐原出身の大卒者は、その多くが地元からの転出を経験する。しかし、それを引き戻すだけの社会経済上の要因がない。地域の大学進学率が 50%を超えた 90 年代は佐原にとって厳しい状況を意味していた。80 年代から 90 年代にかけて地元の高校を卒業した出身者はその点について以下のように述べている。

「この町には優秀な人の受け皿がないから。できる人は出ていってしまって（……）大学まで出た人は医者になるか先生になるかするしかない（……）でも、優秀な人ほど戻ってくるのは難しいよ。もともと新しいものを受け入れる空気のない町だから（Ｋさん[49]ヒアリング)」

「やっぱり自分の居場所というか、自分で商売やってる人間、引き継いでる人間が戻ってるんでしょうね。今となってはそれもある意味幸せかなって思う。自分は当時、田舎だったから出ちゃっていいや、って思いがあったから佐原に戻ることは全く考えてなかったですけど。地元にうちの両親も残ってるし、墓もあるから守んなくちゃいけないし、将来を考えると地元でやっぱり暮らして仕事があって……そうでもなければ戻れない（Ｏさんヒアリング[50])」

Ｎさん自身も確固たる意思があって、佐原へのＵターンを決めたわけではなかった。当時を振り返ってもＵターンの動機は「たまたまに過ぎなかった」と述べている。そこには「前職の反りの合わなさ」があり、ちょうど「転職してもいいかなと考えていた」時期であったことが大きいという。

それでも前職である石油商社に勤め続けていれば、今とは違った安定した生活を送っていただろう、とＮさんは振り返っている。ＮさんはＵターン後に結婚し、現在は二児の父親としての顔を持つが、還流してから今日に至るまで家業以外の収入によって生計を立てて

---

[49] Ｋさんは大学卒業後、修行という形で都心に就職した。現在は家業である木材商を継いでいる。また、今年度よりＧ町の当役長となった。

[50] Ｏさんは大学進学を機会に佐原を転出し、そのまま都心部で就職した。実家は佐原で青果業を営んでいた。現在は都内に居住しているが、将来的なＵターンを企図しつつも、社会経済上の理由からすぐさま踏み切ることの難しさを実感している。一方で自分が高校を卒業してから「自分の実家がシャッター通りになってしまった」ことに衝撃を受け、以来、まちづくり組織への参加や出身町内の若衆への復帰を果たしている。

きている。

「戻った直後は、何をすればいいかも分からなくて（……）卸しの仕事は１月から３月の間に集中していて、それ以外の時期は仕事がないものだから。だから、しばらくは塾講師のバイトをしながら生計を立てていた（Ｎさんヒアリング）」

その後、Ｎさんは６年かけて医療資格を取得した。現在は、他地域の医療施設にアルバイトとして勤務することで、収入を安定させている。そのことをＮさん自身は「どっちが副業だか分からないね」と認めつつも、今日に至るまで家業を特に業種転換することなく、家業とアルバイトの二頭立てで生計を立てている。

（２）ＮさんとＡ町の祭礼組織

Ｎさんの生まれたＡ町は、自町内に山車を抱える町内の一つであり、夏に曳山祭を行う本宿側に属している。前章でも述べたとおりにその人口・世帯数ともに平均的な町内である一方、祭礼の歴史は特に長く、数ある組織の中でも仕来りや習わしには厳格とされる。その厳格さは、例えば「自町居住者、それも出身者でなければ、（若衆（ワケエシ）の）カシラや当役長にはなれない」ことに表れている。

Ｎさん自身は、刷り込まれてしまうほどに小さい頃から祭礼に係わってきたと語っている。それは、Ｎさんの父親だけでなく、Ｎさんの弟も同じであり、とりわけＮさんの弟は、大学進学を機に佐原を転出しつつも、現在は都内の会社に務めつつ、夏祭りの時期には欠かさず戻ってきている。また、Ｎさんの弟は、いわゆる「他町曳き」として秋祭りに参加している。

「祭りの辞め時がなかったんですよね。周りは高校の時に辞めていくもんだけど、自分は辞めずに他の町内を手伝ったりしていた。そんなもんだから、社会人になっても祭りの前には実家に戻って山車を曳いてる。祭りばかなんです（Ｎさんの弟のヒアリング）」

Ｎさんの弟のように「佐原を出ても祭りのときだけは帰ってくる」ことを選ぶ出身者は祭礼組織の規模からすれば少数ではあるが、いずれの町内においても一定数は確認された。こういった出身者の存在は、代々町内の氏子である家系の出身者が「佐原から出ていくこと」が当たり前になっていく中で生じた現象である。それは、生涯佐原を出ることのない自町出身者・居住者によって独占的に担われていたこと祭礼組織が、今やＮさん兄弟のように大学進学を機に地元を離れても祭礼に参加し続けていた担い手の存在なしに維持できなくなったことを示している。

しかし、そのように祭礼を続ける存在は、佐原を出て行く若者の中でも一部分に過ぎない。中高生で祭りを辞めずに祭礼を続ける若者であっても、前章で述べたような年齢階梯的な上下関係の厳しさや地縁・人縁関係の煩わしさ、時間的・金銭的余裕のなさや体力的負担の大きさから疎遠になっていく者が大部分である。

Ｎさんも弟同様、大学進学で佐原を離れても祭礼組織と一定の関わりを持ち続けてはいたが、就職を機にしばらく祭礼から遠ざかっていたという。

「そのころはほとんど来れないよ。祭りもね、大学時代のときに神輿年番だったから、そのときにはさすがに呼ばれて戻ってきたよ。でも、それ以降は、やっぱり、大学の生活のほうが楽しいんだよ。外に出たほうが刺激があるんだから。結局、佐原に戻ってくるまでもなく、祭りからずっと離れてたんだよね。就職してからは祭りで帰ってくることもしなかったから。（……）基本的にその若いうちは仕事の段取りから休みづらいじゃん。そういうので来れなくなっちゃうよね。佐原から離れると帰ってこれない、祭りに出づらいってのが続くんだよね。＊＊くんにしろ、俺にしろ……（Ｎさんヒアリング）」

「自分は家業を継ぐために戻ってきたら祭りやってるけど、戻らなかったら祭りもやってなかったと思う。何年も祭りから遠ざかってると、復帰するのも難しいしさ、仕事続けながら祭りやるのも大変なんだよ（Ｎさんヒアリング）」

大学進学で家を出たＮさんにとって毎年参加できるものではなく、高校を卒業した 18 歳からＵターンする 26 歳になるまでは、年番のように特に人手が必要なときに駆けつけるにとどまっていた。Ｎさんが本格的に祭礼組織に復帰したのは、Ｕターンしてから家業を継いでからのことである。

Ｎさんの言う「戻ってきづらさ」とは直截的には祭礼組織に戻ることの難しさを指している一方で、Ｎさんや他のＵターン者がしばしば口に漏らすように一度転出した者が佐原という町に戻ってくることの困難性をも含意しているのだろう。

（３）寡頭的コントロールとしての「前係り」

そのような状況の中で佐原にＵターンしたＮさんは、家業を継いだ 26 歳時点から今日に至るまで欠かさず山車祭に参加し続けてきた。階梯的な年齢・役職構造を敷いている佐原の若連組織において、端役としての 20 代・30 代を終えて、役職持ちとして曳行の現場を指揮する 40 代を迎えている。たとえば、昨年度行われた山車祭では、Ｎさんは曳行の指揮系統を担う前係り[51]として三日三晩に渡って、山車の曳き回しを行った。

[51] 「前係り」は、山車の前方綱元に位置しながら、山車の曳き回しに関する様々な役割を交代で務める若連の一団であり、曳き回しの花形に当たり、町内でも経験豊富な自町居住者・出身者によって担われている。とりわけ、山車を背にしながら梃子棒回り、高欄回り、足回りなどに指示を出す「綱元係り」は、通例では副若連が務めることになっており、前係りの象徴と呼べる存在である。

図 19 曳行に関する指揮系統を担う前係り

100 人以上の規模で曳き回される佐原の山車祭の中でも、山車そのものに触れることができるのは成人男性からなる若連[52]であり、その中でも梃子・綱元・高欄の指揮系統を担う前係りに関しては、Nさんのような年長の自町出身者・居住者に限られる。その点において、Nさんの担っている前係りは、佐原の祭礼の寡頭的コントロールを象徴している。

それは例えば、曳行の途中で繰り広げられる手踊りにも現れる。手踊りは、寄付金を頂いた先々への返礼として披露されるものであり、山車前方の位置する綱先・綱中・綱元の誰もが囃子に合わせて軽快に踊ってみせる祭りの見どころであるが、そこには共通する一定の様式や流行がありつつも、町内ごとに振付や曲目が分かれている[53]。Nさんは手踊りの「鏡」として、しばしば綱先・綱中の数十名の先頭に立ってA町の手踊りを指揮するが、それはNさんをはじめとする前係りが代々、自町出身者・居住者であり、長年の祭礼経験の中で自町内の手踊りを踊りこなすことができることが前提となっていた。

しかしながら、前章でも述べたようにA町の祭礼組織は 40 代以上とそれ以下の世代の担い手の絶対数に大きな隔たりが見られる。その中でもNさんと同年代で前係りを務めることのできる「資格者」はほとんどいないために、Nさんが「自分がすんなり上の役職に行くことは難しい」状況にあることがA町の祭礼組織において理解されている。

「やっぱHくん[54]あたりの世代は人が少ないからさ、代わりにやれる人がいないから俺の方が上に上がれないんだよね。上の代はたくさん人いるけど、自分の世代になるとごっそりひとがいなくなってるから。（……）町内出身で長くやってる人がいないから、それはもう仕方ない（Nさんヒアリング）」

こういった状況から、Nさんは役職には就いているわけではないが、すでに役職者のみが

---

[52] 小中学生が山車の上（大天井と呼ばれる）に登って大人形の上げ下げや電線・看板に注意することも多いが、これも男子（小若）に限られる。

[53] 手踊りの練習は町内ごとに行われるが、その練習の場は祭礼が近づくと年に数回設定される。扇子・手拭いを含めた手踊りは一朝一夕で身につけることは難しいが、町内出身者は毎年のように訪れる祭りの三日間を通じ、手踊りを「刷り込むように」身につけていく。Nさんだけでなく、A町の祭礼組織の前係りは誰もが幼少期から祭礼に参加し、物心付く前から手踊りに触れてきたという。

[54] HさんはNさんより 2 つ年下の町内出身者であるが、Hさんも大学進学を機に一度地元を転出している。数年前に妻子を連れて町内に戻ってから二十数年ぶりに祭礼組織に復帰した。そのきっかけは子どもが祭礼に参加できる年齢になり、父であるHさんが参加しないわけにはいかなくなったからだという。一方で、Hさん自身は幼少期に祭礼に馴染んでいたこともあり、町内の手踊りはいまだに「自然と足が動く」ものであると語る。

出席する会議に参加しながら、A町の前係りとして山車を曳き回すまでになっている。それは、Nさんが長年祭礼に参加してきた自町出身者・居住者であり、さらに町内で自営業を営んでいる数少ない氏子の一人であることが大きく作用している。E町やF町では数少ない自町居住者が町内の祭礼組織を支える「祭礼エリート」として、他の町内における立場以上のものを担っていた。それは例えば、他町内では数年で持ち回るような役職を一人の人間が長く受け持つような状況に表れている。その点において、Nさんも谷間の世代における数少ない「有資格者」として位置づけられているのである。

（4）Nさんからみた「祭りの面倒臭さ」

このようにA町祭礼組織に長年参加し続けているNさんであるが、一方で祭礼組織の持つ守旧的な体質について「面倒臭い」「あほらしい」ものに感じることも少なくないと語る。前節で触れたように、Nさんは同世代で数少ない自町出身者として祭礼組織に関わる立場にあり、そのために多くの仕事を引き受けざるをえなくなっていることも大きい。

この点について、Nさんは幼少期から町内の祭礼に関わってきた立場を持つ一方で、地元からの転出を経験した部外者の立場からも、佐原の祭礼の「面倒臭さ」について幾度となく語っている。

「美羅（寄付金）もらうくらいだったら……祭りをただやるだけであれば、自分たちでその分お金払ったほうが安くあがるんだよね。だってさ、飲み会一回いくじゃん？　ひとりで3000円、下手したら5000円くらい飛ぶわけじゃん？　それを10人ぐらいで行って。そのお店から5000円くらいもらうわけじゃん。ということは、10人5000円ずつ出し合えばもう10倍くらいお金になるわけだよ。けれどもそれはやっぱり違うわけじゃん、行ってお酒を飲んでというところから始まるわけで。なんでそれ一回の会議で決めないのって思うわけだよ。（……）例えばこのデザインを決めるのにこの案があがってきました。じゃあどうしますか、これにしますか。そのときに他のやつも一緒に決めちゃえばいい。コース決めちゃえばいいじゃない、一緒にやればいいって思うんだけどそのためにわざわざ会議しなきゃいけない。それもどっかで飲みながらやらないといけない。まさしくそういうのがあるから端からみていてとても面倒くさいわけですよ、一回外にでた人間からすると（Nさんヒアリング）」

ここでNさんの言う「祭りの面倒臭さ」とは、直截的にはこれまで佐原の山車祭が保ってきた祭礼の慣習・仕来りや祭礼組織内における役職・年齢階梯制度について語られるものである。Nさんにとって、祭りは「面倒臭い」ものであるが、そもそも佐原の祭りは「面倒臭さ」をその美徳にしてきたとNさんは言う。

「佐原の祭りは面倒くさいのがいいから。例えばのの字でも、ゆっくりまわす。山車の引き回しもゆっくり引くのがきれいだから。要は我慢する祭り。こんな重たい山車をゆっくりと平然と引いているっていう自己満足の世界。それを平気な顔してやらなきゃいけない。そういうふうに我慢はしてるんだけどそれを顔に出さないのが粋なんだっていう。下座はテン

ポ早いやつと遅いやつがあって、普段は遅いやつで山車をゆっくり動かすっていう、しかもとまらずに回す……（Ｎさんヒアリング）」

「あのね、戻って来づらい。確かに祭りをやってればいいんだろうけど、やっぱり祭りって一回外に出た人間からいうとすごくめんどくさいの。なんでここまでめんどくさいんだって思うんだけども、しきたりがあるからしょうがないの。合理化できるところはいくらでもあるわけだよ。けれどもそういうことは合理化しないんだよね。（……）やっぱりここは古い町だから（Ｎさんヒアリング）」

これまで本稿が取り扱ってきたように、伝統的な都市祭礼としての佐原の山車祭は、今日の地域・共同体の社会経済状況や人びとの価値観・生活様式との間に齟齬が生じており、少なからず選択と変化を迫られてきた。

しかし、Ｎさんへのヒアリングの中で「ここは古い町だから」と語られているように、それは祭礼組織という枠を超えて、むしろ佐原という地域が持っている守旧的な側面への問いかけをも含意しているように思われる。A町内のような山車持ち町内は、昭和以降の共同体解体が進んでもなお祭礼を介して単一共同体的な幻想が保たれてきたおり、その人間関係は祭礼の内外に及ぶ。Ｎさんが祭礼やその組織体に対して抱いている閉塞感は地域コミュニティに対して抱くものと不可分なものであった。

（５）Ｋさんの「時間の止まった町」

大学卒業後に佐原に戻って家業を継いだ一人であるＧ町のＫさん[55]も、祭礼と町の関係について次のように述べる。

「佐原も変わっていて、自分もいろいろ聞かれるんですけど、そんなに大きく変わってるわけではないですよ。でも自然淘汰として、この町は優秀な人が返ってこれないんですよ。仕事がないから。優秀な人が流出する町なんです。ちりぢりになって。ある程度時間が経ったら戻ってくることはあるけれど。自分で商売をやって、ここにないものを持ってくる、ないものを作っていくしかない。出てくのは仕方ない。受け皿がない。会社もない、仕事もない。周りから取り残されたようなところがある。祭りだってある意味同じですよ。山車の曳き方も昔から変わってないのは変えられないからです。良くも悪くも夏と秋の祭りで時間が止まる町なんです。（……）だけど、そんな祭りが好きだから、みんなその時だけは戻ってくる（Ｇ町・Ｋさんヒアリング[56]）」

「*まちづくりやってる人に若い人なりに意見言っても「お前らはなんも分かんねえんだか*

---

[55] なお、Ｋさんは昭和 50 年代の佐原に生まれ、大学進学を機に東京へ転出した。もともと家業を継ぐつもりであったという。また、Ｇ町の若衆の頭を務めた経験を持ち、現在は当役として自町内の祭礼に参加している。

[56] Ｋさんは次のようにも述べている。

「商店主、戻ってきてる人は少ないので、30 代、40 代の人なんかはみんな同じ人が集まる、学校とか組合とか。小さい町なのでそんなに集まる場所があるわけでもないし、情報は早い。ほとんどの方がお祭りに絡んでくるので、どこかしら誰かが知ってる」

ら黙ってろ」って。なんも分からねえくせにって。実際あったんですよ。ばからしいから黙ってましたけど。そういう町でもありますよ、よくもわるくも。そうですか、どうもすいませんって。今はちょっと変わってきたと思いますけど、佐原の風土も。それでも新しいやり方がわからないままですよ（Ｋさんヒアリング）」

Ｋさんは同じヒアリングの中で、佐原のことを「時間が止まった町」とも表現する。そこには、自営業者として長年佐原の商業振興に関わってきたＫさん自身が直面してきた苦悩があった。昭和 50 年代に生まれたＫさんは昭和期の佐原の商業を象徴する駅前デパートが相次いで姿を消し、同じ町内の店が屋号を畳むのを目の当たりにしてきた。90 年代以降に始まった観光まちづくりから「風土が変わってきた」とＫさんは言うが、それでも「新しいやり方が分からない」「取り残されたようなところがある」町であると述べる。

そんなＫさんにとって、祭礼は「新しいやり方が分からない」「取り残されたようなところがある」ものとして同様に認識される存在であるが、「そんな祭りが好きだから、みんなその時だけは戻ってくる」と語るように肯定的な意味でも捉えられている。

山車祭は「時間の止まった町」という佐原の町の守旧的・否定的な一面であるが、一方で、祭礼参加者は祭礼を介することで、そういった側面を積極的に肯定する機会としている。その点において、佐原の山車祭は「町の象徴」として受け止められ、かつて「江戸優り」とも唄われた佐原の繁栄の精神性が強く懐古されたものであるといえる。それは全国的にみられる都市型の曳行祭の中でも、昭和以降、急速に商業の中心地としての地位を失った地方都市としての性格に由来するものであろう。そして、それは生活集団の一員として生活することを相互に認知し合うという共属確認としてのレベルを超えて、もはや町内の存在確認そのものが祭礼によって行われていることを意味する。

「祭りの三日間は人でごった返す。ふだんは人通りもない町だけど、祭りのときだけは閉まってる店も開いてる。外に出てった人も地元に帰ってくる。（……）そういうのを見てると、祭りやってて良かったなあとか地元に帰ってきて良かったなあとか思う（Ｋさんヒアリング）」

「三日三晩山車を曳き続けて最後の夜には疲れ果ててるけど、祭りが終わってほしくないっていう気持ちもある。名残惜しい気持ちというか。祭りが終わったら、またいつもの佐原に戻る。そう思って、次の日からまた来年の祭りのことを考えている（Ａ町当役）」

「江戸まさりなんて言葉もあるけどね。みんな佐原の祭りが一番だと思ってて、祭りをやってるときだけは一番の気持ちでいる（Ａ町若衆ヒアリング）」

（６）祭りへの思いと葛藤

Ｎさんは、山車祭を佐原に住むための当然の所与として受け止めていた。それは、Ｎさんの感じる「面倒臭さ」に直結している。

「やっぱり祭りをやらないわけにはいかないじゃない（……）祭りの仕事も付き合いも増えるけど……やっぱり誰かが祭りをやらないと。だから、面倒臭いんだけどさ（Ｎさんヒアリ

ング）」

Ｎさんがそのように考えるのは、自身の出自や立場に多くを負っているといえるだろう。本稿で取り上げてきたその他のＵターン者もその家柄や家業後継の立場から少なからず佐原に戻り、業種転換や副業・兼業を余儀なくされながらも家督を継いで屋号を守っている。そして、それと同等に自然な流れで祭礼組織のヒエラルキーを上り詰めていく。むろん、それは担い手全体からすれば少数に限られる。ＫさんやＮさんの同世代の出身者であっても、若連に加入して祭礼を続ける担い手は一部であり、その若連さえも様々な要因で祭礼や地元から離れていく。その点において、Ｋさん・Ｎさん・Ｔさんは、佐原の町内会コミュニティにおける人縁・地縁の濃いケースに該当しており、当人の資質や意思とは異なる多くの引力が作用している。そして、そのことがＮさんにとっての「面倒臭さ」に拍車をかけているともいえる。

Ｎさんにとって地元はどういう場所ですか、という問いに対して、Ｎさんは次のように答えている。

「逃げ出したい場所。（……）やっぱり面倒臭い町だと思うから。佐原のまちなかって商店主がいて、社長さんが多いわけだけど、社長さんって今のご時勢すごくめんどくさいんだよね。サラリーマンで生きるほうが全然楽だよね（Ｎさんヒアリング）」

「自分自身も佐原にずっといた人間ではないので（……）一回出てたから言いたいこといっているけど、佐原のまちなかの人間からしたらば、また違うこと言うと思う。祭りだって、おれはそんなに好きなわけじゃないしさ。今言った話を佐原の町中でしたら、何言ってんだこいつはってなるからね（Ｎさんヒアリング）」

Ｎさん自身、そう答える自分のことをあくまで少数であると認識しつつも、（５）で述べたように、それでもなおＡ町祭礼組織の核となる担い手として祭礼に関わり続けてきた。「逃げ出したい」という言葉が象徴するように、そこにはＵターン者として佐原に戻ってきたＮさんの強い葛藤があった。

そして、このような祭礼・地域に対する複雑な思いの中で、Ｎさんは佐原の山車祭について以下のように述べている。

「祭りがなかったら、この町はとっくにダメになっていると思う（……）酒屋とか飲食店とか祭りがあるから保ってるようなところがあって、みんな文句いいながらも行くし、祭りがあるから自分と年齢が離れてても知ってる人がいるからコミュニティができあがってる。祭りのためにお金も時間も湯水のように使う人がいるんだよ、（……）たしかに祭りそのものは遊びだし、飲んだくれた祭りなんだけど、祭りを楽しみにしてる人はいるからねえ（Ｎさんヒアリング）」

Ｎさんにとって、佐原の山車祭は自らの地元の「面倒臭さ」を象徴するものでもある一方、「なかったら、この町はとっくにだめになっている」ものとして町にとってなくてはならない存在となっている。その思いを一元的に説明することは困難であるが、均質化の進む社会に抵抗するかのように自町出身者・居住者によって成り立っているＡ町祭礼組織にとって、

Ｎさんは代替不可能な担い手の一人として機能しているのであり、それゆえに、Ｎさんは「選べない縁」としての祭縁――それは実質的な地縁人縁である――の柵の中で佐原の山車祭をたしかに担っているのである。

３節　小括――祭りの主観的意味

本章では、A町の祭礼組織に所属するＮさんの事例から、町内に還流して家業を継いだ一人のＵターン者がどのような立場で祭礼に関わり、祭りに対してどのような思いを持っているのかを記述した。そこから見えてくるのは、佐原の山車祭が志向してきた「自町出身者中心主義」が共同体解体の中で岐路に立たされはじめている状況であり、それを支える担い手の祭りに対する主観的意味であった。

寡頭的な「祭礼エリート」の存在を前提として組成されてきた佐原の祭礼組織において、かつての旦那衆――つまり家持・地借人として町内に土地を持って店を持つ氏子の存在は今なお明確な意味を持っている。今なおA町の祭礼組織は「祭礼エリート」による階層性が敷かれている。

その点において、ＮさんはA町の祭礼組織における「有資格者」であるということができるが、Ｎさん自身が地元に戻ってきたのはあくまで偶然が重なった結果であった。そして、偶発的な条件を踏まえてもなお、そのＵターンは多くのものをＮさんに取捨選択することを意味した。大企業のサラリーマンとしてのキャリアを捨て、一から家業を継ぐという選択肢のためにＮさんは並々ならぬ努力を続けてきた。

ＮさんのようなＵターン者の存在は決して例外ではない。他町においてもＴさん、Ｋさん、Ｓさん[57]といった担い手の存在があり、そのいずれもＮさん同様、祭礼組織内の中核を担っている。また、「屋号だけでも絶やさ」ぬように業種転換、兼業・副業による経営努力に務め、その屋号を守ってきた。それでも家業を継続することが困難な担い手の中には、市役所や教師といった公務員に就いたケースも多い。

しかし、恒常的な人口減少と若年層流出のみられる佐原において、こういった「祭礼エリート」の存在は必ずしも持続可能な状況にない。実際、本稿で取り上げた担い手の多くが自分の子息を後継者として想定しておらず、「屋号」を畳むことを少なからず意識している。一方で、佐原の山車祭は、他都市の曳行祭のような「中核となる担い手＝自町出身者・居住者」と「周縁に位置する担い手＝他町曳き・転入者・助っ人」の境界の融和やが進まず、90年以降の急速な人口減少と若年層流出の中で「祭礼エリート」や中間層に位置する担い手を

[57] Ｓさんは現在40代後半で本宿Ｈ町の祭礼で当役を務めている。Ｓさんの実家は古くから続く左官屋であり、かつては一族や住み込みで働く下宿人が多く周りにいたという。バブル時代に都心に就職し、設計事務所で働いていたものの、親の声もあって地元に戻ることとなった。しかし、家業の左官屋を続けるのは難しいことから、その経歴を活かし、まちづくりに関わる仕事に就いている。

準備することができなかった。

そうした状況から、佐原の山車祭は今後の世代交代にともなって既存の自町出身者・居住者中心的な祭礼運営が不可能なものとなっていくことが想定される。しかし、本章での語りのなかで、佐原の人びとにとって山車祭は「地域の象徴」として大きな意味世界として受け止められていることを明らかにした。

多くの人員的・経済的負担や男性中心主義・年齢階梯主義を強いる祭礼は、今なお担い手を地域コミュニティに結びつけるものであり、佐原の守旧的な側面――Ｎさんの言葉を借りれば「面倒臭さ」を象徴するものであるが、一方で祭りは長い経済的停滞の続く佐原で生きていくことを肯定できる舞台装置となっている。その点において、佐原の山車祭は固有の意味を付加されているということができよう。「祭りのために生きている」と豪語する担い手にとって山車祭は「佐原に生きていく」ことの意味を見出せるものであり、「祭りやってて良かったなあとか地元に帰ってきて良かったなあとか思う」とまで言わしめるものであった。一方で、Ｎさんが「逃げ出したい」とさえ語ったように、担い手自身にとって祭礼に対する複雑な思いや強い葛藤があり、その思いを一元的に説明することは困難である。しかし、山車町内によって構成される佐原において、祭礼の存在は「佐原である」ことと不可分なものであり、少なくとも「古い佐原」を生きていく上で避けることのできないものとなっている。

第６章　「祭礼の維持」と「町内の持続」

１節　「維持」と「持続」

既往の都市祭礼研究において、祭礼の維持問題は、地方都市の伝統的祭礼が直面している喫緊の課題として数多く指摘されてきた。とりわけ、山車の曳行には多くの経費と人手を必要とするために、何らかの形で担い手の不足に対応していかざるをえない。その対応をいくつかの祭礼は「変化」することによって達成した。前掲松平を始めとする多くの論者が指摘するように、新たに流入した住民や会社・学校によって繋がる「選択縁」の担い手によって支えられることが、今日における伝統的祭礼の一つのあり方として確認されるようになった。

しかし、注目を浴びてキラキラと輝く祭りがある一方で、人知れずその灯を絶やす祭礼があるように（田中：2007 162)、社会的基盤の変化にうまく対応できている祭礼ばかりとは限らない。そもそも祭礼が存続する前提となっていた共同体そのものが瓦解する時代にあって、祭礼を「維持」するとは何を意味しているのだろうか。

たとえば、既存の都市祭礼研究において、さまざまな表記ゆれがありつつも、祭礼は「維持」あるいは「伝承」「継承」されるものと位置づけるのが一般的である[58]。後者の「伝承」は、民俗学・人類学による旧来的な研究アプローチに立ったものが中心である一方で、祭礼を「維持」するものと捉える立場は 70 年代以降の都市人類学・社会学、あるいは都市を対象とする工学分野において確認される。その研究手法や目的の設定は多岐に渡っているが、いずれにせよ「祭礼の維持」が一つの研究主題となっていることは伺える。

さて、本研究では佐原地区における山車祭の事例から、その祭礼の維持問題について検討してきた。佐原の山車祭においては、百年単位の歴史を有する町内が山車を継承しながら、各々の町内が自町出身者・居住者を頂点とする単一共同体的な性格の祭礼組織を「維持」していた。それは、内外を問わず、「意固地になっている」とさえ語られるほどのものであり、その点において、佐原の祭りは変わらずに在り続けることにこだわりを見せるものと評価できる。それは、古いやり方にこだわるあまり、曳き回すことそのものを断念せざるをえない状況に追い込まれつつある町内の姿に表れている。現実に祭礼を続けていくためには多くの変化に対応せざるをえないが、それでも佐原の人びとは「変わらずに在り続けること」に執着せざるをえない。

むろん、どのような伝統的祭礼であれ、このような「維持」の側面を持つものであろう。

---

[58] 論文検索サイト「CiNii」(URL：http://ci.nii.ac.jp/）によれば、「祭礼（または祝祭、祭り)」に対して、「維持」をタイトル・キーワードに含むものは 49 件、「伝承」を含むものは 87 件、「持続」を含むものは 10 件、「存続」を含むものは 5 件確認された（最終検索：2017 年 1 月 20 日)。ただし、「持続」と「維持」を併記するものを含む。

不合理とさえ思える多様なタブーやルールの存在が、伝統的祭礼の同一性を担保していることも確かである[59]。しかし、佐原においてはその傾向が色濃く表れているのであり、祭礼組織の存続にあたって一つの特質となっていた。であるがゆえに、「変わらずに在り続けること」と「在り続けるために変わること」のせめぎ合いが生まれていた。たとえば、「他町曳き」や「Uターン者」が祭礼組織に登場した点において、佐原の祭礼も変化したように見える。しかし、その選択は自町出身者によって担い続けるという、佐原の祭礼における「根幹」を変えずにいるために必須のものとなっていた。その意味において、変わらずに在り続けさせるという「維持」は、結果としての「持続」に先立って存在する。しかし、「持続」＝在り続けるためには変わらざるをえない。祭礼の担い手はその両価的な価値判断の中で祭礼を続けているのである。それは、前章でのＮさんの語りの中にも垣間見えていた。

「佐原の祭りは面倒くさいのがいいから。例えばのの字でも、ゆっくりまわす。山車の引き回しもゆっくり引くのがきれいだから。要は我慢するまつり。こんな重たい山車をゆっくりと平然と引いているっていう自己満足の世界。それを平気な顔してやらなきゃいけない。そういうふうに我慢はしてるんだけどそれを顔に出さないのが粋なんだっていう。下座はテンポ早いやつと遅いやつがあって、普段は遅いやつで山車をゆっくり動かすっていう、しかもとまらずに回す……（Ｎさんヒアリング）」

「あのね、戻って来づらい。確かに祭りをやってればいいんだろうけど、やっぱり祭りって一回外に出た人間からいうとすごくめんどくさいの。なんでここまでめんどくさいんだって思うんだけども、しきたりがあるからしょうがないの。合理化できるところはいくらでもあるわけだよ。けれどもそういうことは合理化しないんだよね。（……）やっぱりここは古い町だから（Ｎさんヒアリング）」

私たちが何かしらを続けていこうとするとき、避けられない変化にいかに対応していくか、という「持続」の問題を抜きにして語ることはできない。伝統的祭礼に関して言うならば、目まぐるしく変わる社会経済状況の変化の中で何をどう取捨選択していくかという問いに換言できる。一度は規模縮小しながらも 80 年代に何倍もの規模に膨れ上がった愛媛県の西条まつり[60]や祭りの花形であった「喧嘩」を徹底的に規制・排除することで「見せる祭り」へと変容を遂げた青森県の弘前ねぶた（鈴木: 2011）など、何かを変えていくことによって今日の存続に至った祭礼も数多い。強いていうならば、この「在り続けるためにいかに変えていくか」という視点は、「変わらずに在り続けさせよう」とする「維持」の視点と背

---

[59] たとえば、今なお多くの伝統的祭礼・祭祀行事において、「ケガレ」を理由とした女性の参加の排除が見られている。小國（2014）は、女性の出産や月経を産穢として歳費から排除することによって、氏子町内における家父長制を保持しようとする政治的意図を主張しながら、現代社会においては「伝統」の名の下で女性が排除され続けていることに合理性がないと主張している。

[60] 愛媛県生涯学習センター, 2010「西条の秋祭り」『データベース「えひめの記憶」』（http://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:1/4/view/788 最終閲覧：2017 年 1 月 18 日）

反的に存在している。それは、前者＝「維持」が意志を持ちながら主体的に何かを存続させようとする営為であることに対して、後者＝「持続」が結果として何らかの存在が存続している状態を示していることからも説明できる。つまり、「維持」が主体的な働きかけを含意する一方で、「持続」は受動的な状態遷移を示す[61]。この差異が、佐原における祭礼組織の中に表れている。

2節　「祭礼」と「町内」――結論に代えて

佐原地区の町内は、1915 年に旧佐原町を 33 区に分割した際に区域が設定されているが、それは江戸時代中期に発生した「町」単位と大きく異なるものではなく、今日に至るまで存続し続けてきたものであった。

これまで見てきたように、佐原の祭礼組織は町内ごとに存立する。古い山車持ち町内においては、祭費を含む町内費は「家格」によって設定されており、各家ごとに決められた「株割り」を負担することになっているが、町内からの許可がなければ自ら上げることも下げることもできず[62]、また祭礼組織の人事を町内の役員会が決定し、各年齢集団ごとに様々な組織が作られている[63]など、祭礼は町内における日常的組織と深く繋がっている。

しかし、曳き回しの場においては「町内」はさらに大きな意味を有している。「自町内の山車をいかに優美に曳き回すか、遅行することなしにいかに悠然と曳くか」は曳き手にとっての最大の関心事であるように[64]、祭礼を通して担い手は自らの町内を象徴的に受け取っていく。筆者が参加した曳行において、「のの字回し」の責任役を任された若衆は無事に「のの字」をやり遂げた瞬間、その場に立ち尽くしながら、ただただ号泣していた。そして、長年祭礼に関わってきた 50 代の曳き手は次のように語る。

「祭りの日になってさ、町内の山車を曳いてるのを見ると、昔に比べて人が減っちゃったなあって思うけどさ、でもこれだけ人が残ってるんだなあとも思うんだよね。（……）いつも

---

[61] 言語学者の岩本（2008）は、「維持」を意志によってコントロールされた持続状態と定義し、「持続」を意志性のない持続成文からなる状態とみなしている。

[62] 林（1997：214）はその研究調査の中で次の事例を報告している。「ある町内で、区長がその当時事情が苦しくなった家に対して、町内費を軽減してあげようと提案したが、当事者が「我が家の面子を潰している」と怒り出し、区長と大喧嘩になったことがある。（……）その町内の大多数の違憲は、「区長の思い違い、やりすぎ」ということであった」

[63] 各年齢集団の会議は、青年会の会議というようにあくまで祭礼と関係のないものとして行われているが、両方の所属員がほぼ同一であるため、実際的な違いはなくなっている。

[64] 自町内の山車への愛着は、子ども時代から強く意識されている。一方で、高校進学時に祭礼から離れていく若者も多い。

「小学校、中学校は自分は思いっきり市内に住んでたのでみんな祭りが好きでしたね。祭りのときじゃなくても普段の学校で自分の町内の話になって、うちの方が人形がでかいとかカッコいいとか、そういうくだらないことからケンカになったりしたくらい、やっぱり自分の町内の祭りに対する思い入れは強かったですね（Oさんヒアリング）」

は帰ってこないやつも祭りの日だけは町内に戻ってきてさ（Ｅ町当役ヒアリングより）」
「祭りの三日間は人でごった返す。ふだんは人通りもない町だけど、祭りのときだけは閉まってる店も開いてる。外に出てった人も地元に帰ってくる。（……）そういうのを見てると、祭りやってて良かったなあとか地元に帰ってきて良かったなあとか思う（Ｋさんヒアリング）」

毎年変わらぬ規模と様態で山車が曳き回されている限り、佐原の人びとは絶えず行われる祭礼を介して自らの町内の存在を認識する。むろん、それは人員的にも経済的にも町内の多くの資源を動員するシステムであり、親和や共同性の感覚と表裏一体にある抑圧的な支配関係を生み出してきたことも確かである。Ｎさんの感じた「逃げ出したさ」とは、自ら選ぶことのできないしがらみに対する心情であったろう。しかし、それでも佐原の人びとにとって、祭礼は簡単には手放すことのできないものであり、連綿と続けてきた規模と様態を可能な限り「維持」、つまり変わらずに在り続けさせていこうと試みざるをえないものであった。そうであるがゆえに、佐原の人びとは山車祭に自らの町内の存在を「仮託」することができるのである。三日三晩の間、２トンを軽く超える重さの山車を自町内の人びとだけで曳き回したという実感が――それが実体の伴わない体裁だったとしても――彼らにとっての町内を在り続けさせていた。

しかし、小さな町内にとっては、そのような単一共同体的な祭礼を「維持」することの限界が近づいている。Ｅ町・Ｆ町のように数人しか自町居住者の残っていない町内では、規模の充分な町内では数年で交代するような役職を十年近くの間、同一人物に担わせることで保持してきたが、それさえも困難になりつつあった。そして、Ｆ町ではこれまで欠かさずに続けてきた山車の曳行をはじめて断念しようとしている。それは今後、同質の「維持」問題を抱えるであろう佐原の祭礼組織が一つの曲がり角に差し掛かったことを意味しよう。一つの山車が姿を消すということは一町内の不在を示すだけでなく、これまで 24 台を曳き続けることで「維持」されてきた佐原という町が綻んでいくことをも示唆するからだ。

本稿が主題としている佐原の祭礼の「維持」問題とは、社会集団としての佐原の町の「持続」に関わる問いである。そこには、逃れられない人縁・地縁の中で生きることの葛藤や難しさを含みながらも、それでも佐原で生きていることの意味を人びとに感じさせ、あるいは投げ出させるものとして祭りが存在していた。その中で、われわれは佐原の山車祭から、そのままで在り続けようと努力する、今日の地方都市の一つの姿を読みとることができるだろう。

参考文献・研究：

芦田徹郎,2001,『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社
有末賢,1983,「都市祭礼の重層的構造―佃・月島の祭祀組織の事例研究―」『社会学評論 32』
有本尚央,2012,「岸和田だんじり祭りの組織論――祭礼組織の構造と担い手のキャリアパス」『ソシオロジ 57』
伊藤亜人（編）,1994,『佐原における商家の生活と家業』東京大学教養学部文化人類学研究室調査実習報告書
林慶澤,1998,「日本の地方都市における商家の家業と社会的関係―千葉県佐原市の事例分析」
岩本通弥,1985,「商家の仕組みと営み―商人の日常的世界―」網野善彦・大林太良（編）『日本民俗文化大系 11 都市と田舎』小学館:187-232
岩本遠億,2008,「事象アスペクト論」開拓社
上野千鶴子,1987,「選べる縁・選べない縁」栗田靖之（編）『現代日本文化における伝統と変容 3―日本人の人間関係―』ドメス出版:226-243
卯田卓也・阿部依子,2015,「過疎地域における祭礼の存続形態―佐久市望月地域の榊祭を事例として―」『地域研究年報 37』:33-59
小國真理,2014,「女性のケガレと地域社会：祭礼行事への女性参加をめぐって」『現代社会研究科論集：京都女子大学大学院現代社会研究科紀要』第 08 号:95-97
香取市,2008,「香取市佐原伝統的建造物群保存地区」『地図情報』第 27 巻第 4 号:13-15
　　-,2016,『香取市人口ビジョン』
佐原市,1977,『佐原市史』
　　-,1984,『佐原市観光振興基本計画』
　　-,1994,『佐原市観光振興ビジョン』
佐原市教育委員会, 2001,『佐原山車祭調査報告書』
佐原山車文化研究会（編）,2016,『弊台年番記録集―佐原新宿諏訪神社大祭 明治 10 年～平成元年』
白井清兼他,2009,「旧佐原市地区におけるまちづくり型観光政策の形成プロセスとその成立要因に関する分析」『社会技術研究論文集 6』
水郷佐原観光協会,2013,「佐原の山車祭り」『旅なび！佐原』
（http://www.suigo-sawara.ne.jp/entry-info.html?id=5733　最終閲覧：2017 年 1 月 20 日）
鈴木章生,2011,「都市祭礼の伝統と変容―弘前の「喧嘩ネブタ」を中心に―」『目白大学 人文学研究第 7 号』
清宮良造,1995,「佐原の山車まつり」,やまと孔版社

清宮良造・小出皓一,2003,『定本 佐原の大祭山車祭り』
田井竜一・植木行宜（編）,2005,『都市の祭礼―山・鉾・屋台と囃子―』岩田書店
大地麻友,2012,「伝統的祭礼の変容に見る、地域帰属の再構築」
(URL:http://www.waseda.jp/sem-muranolt01/SR/S2012/S2012-ochi.pdf)
田口一博,2009,「佐原におけるまちづくりの政策システム」『土地総合研究 2009 秋号』
竹沢尚一郎,1999,「都市祭礼研究の課題と可能性」『宗教と社会 別冊 1998 年ワークショップ報告書』
竹元秀樹,2010,「地域社会における地縁的な共同性形成の現代的解明」『法政大学大学院紀要 64』
―,2011,「地方都市における近隣祭りの持続と変容」『法政大学大学院紀要 67』
―,2014,「祭りと地方都市-都市コミュニティ論の再興」新曜社
田中重好,2007,『共同性の地域社会学』ハーベスト社
田中重好・池上良生・丹野正・田中二郎,1983,「弘前ネプタ祭りの研究」『文教論叢 18(3)』
田中滋・吉田竜司,2011,「祭りのオーソプラクシー化と社会秩序―曳山祭を事例として―」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要 13』
玉野和志,1999,「都市祭礼の復興とその担い手層」『都市問題第 90 巻第 8 号』
塚原伸治,2011,「現金の生々しさと「ふさわしくない」取引―手形の利用からみる伝統経済の美学―」『比較民族研究 26』
中里亮平,2010,「祭礼におけるもめごとの処理とルール―彼はなぜ殴られたのか―」『現代民俗学研究 2』
中野紀和,2007,『小倉祇園太鼓の都市人類学―記憶・場所・身体―』古今書院：1-23
弊台年番西関戸区,1993-1995,『平成五・六・七年諏訪神社祭礼 弊台年番記録』
中村孚美,1972,「秩父祭り―都市の祭りの社会人類学」『季刊人類学』3 号:149-190
パンノイ・ナッタポン,2008,「歴史的町並みを活かした観光まちづくりの成立過程と実態に関する研究―千葉県香取市佐原伝統的建造物群保存地区を事例として」
樋口博美,2014,「伝統的都市の祭礼にみる共同性の維持と創造―山鉾祭礼の“祭縁”を 事例として―」『社会研究資本研究論集 5』
深澤あかね,2010,「商業町の祭り研究における分析視角の検討」『東北大学大学院教育学研究科研究年報 58・2』
―,2011,「商業町の変容と祭りの存続:岩手県花巻における実証研究」
―,2014,「商業町における祭りの変遷：―祭りの背後にある商業経営と生活に着目して―」『社会学年報 40・0』
福川裕一,1983,「佐原の町並み よみがえれ、水郷の商都」『観光資源調査報告書 vol.2』日本ナショナルトラスト
福原敏男,1999,「山車を失った都市祭礼――津八幡宮祭礼の戦後――」『国立歴史民俗博物館編 民俗学の資料論』吉川弘文館

文化庁,2016,「山・鉾・屋台行事のユネスコ無形文化遺産登録について」
(http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/2016120101.html 最終閲覧：1月 22 日)
松平誠,1990,『都市祝祭の社会学』有斐閣
—,1994,『現代ニッポン祭り考—都市祭りの伝統を創る人びと—』小学館
—,1999,「都市祝祭の現代的意味」『都市問題第 90 巻第 8 号』
—,2008,『祭りのゆくえ——都市祝祭新論』
武藤康弘,2007,「奈良の伝統的祭礼の保存と伝承に向けて」『奈良女子大学文学部研究教育年報 3』
森田三郎,1980,「長崎くんち考——都市祭礼の社会的機能について」『季刊人類学 11-1』
柳田国男,1969,『日本の祭』角川学芸出版
谷部真吾,2010,『祭礼研究の軌跡 ： 中村孚美と米山俊直の祭礼論を事例として』
吉田竜司,2010,「伝統的祭礼の維持問題——岸和田だんじり祭における曳き手の周流と祭礼文化圏——」『龍谷大学社会学部紀要 37』
米山俊直,1986,『都市と祭りの人類学』河出書房新社
—,1999,「地縁再生の装置としての祭礼」『都市問題第 90 巻第 8 号』
和崎春日,1996,『大文字の都市人類学的研究—左大文字を中心として—』刀水書房

謝辞

本論文を作成するにあたり、終始熱心な指導と適切な助言を賜り、未熟な筆者を暖かく見守って下さった東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻の清水亮准教授に深く感謝いたします。研究指針を二転三転させながら糸口を掴めないでいた筆者を根気強く導いていただいたことで本論文を執筆することができました。また、同専攻の岡部明子教授には地域の持続を考えるうえで様々な視点から副指導を賜りました。深く感謝申し上げます。

本研究を始めるきっかけとなったのは、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻都市デザイン研究室のプロジェクトチームに参加させていただいたことにあります。同専攻地域デザイン研究室 窪田亜矢特任教授はもとより、同専攻卒業生である今川高嶺さん、李美沙さん、在学生である滝澤暢之さんには門外漢である筆者を暖かく迎えてくださったことを心よりお礼申し上げます。また、東京大学修士課程在学中の神谷安里沙さん、大鶴啓介さん、学部生の薮田航平さん、元研究生の高沂琛さんをはじめとする佐原プロジェクト関係者の皆様からも多くの助言と協力をいただき、大きな刺激となりました。心より感謝申し上げます。

そして何より、新領域創成科学研究科博士課程在学中であり、直接声をかけてくださった中野卓さんと都市デザイン研究室 修士課程在学中の濱田愛さんには、筆者の１年半弱のプロジェクト参加の間、侃々諤々の議論やフィールドでの同行を通じて、大変多くのものを受け取りました。お二方には深甚の謝意をお伝えします。

多くの方との出会いとその学びに支えられた本論文ですが、何よりも大きかったのは「佐原」という町との出会いでした。その右も左も分からなかった筆者が足繁く通うようになり、論文の研究対象地として設定させていただいたのも、その出会いに強く心動かされたからです。その中でも、祭りを研究の骨子としたのは、これまで多くの研究者・研究機関を迎え入れてきた佐原という町において、「祭り」という存在を抜きにその存続を考えるのは避けられないと考えたからでした。

そんな祭りの話を聞きたいと何度も佐原を訪れた筆者を若衆の一人として迎え入れ、話をしてくださったＡ町若衆連合をはじめとする佐原の山車の曳き手のみなさま、中でも実際に筆者を祭礼組織に紹介してくださっただけでなく、多大な協力と助言を賜りました中西康裕さまとそのご家族のみなさま、都内で勤務しながらも佐原に深い関心と情熱を寄せられている小倉悟史さまには、何度もヒアリングをさせていただいただけでなく、地元のご友人やお知り合いを紹介していただきました。その他にも数多くのみなさまに調査にご協力いただきました。みなさまから伺ったお話が本論文を書く上で何より大きな励みとなっています。心より感謝申し上げます。

また、斎藤勝さんをはじめとする香取市都市整備課のみなさま、「佐原の町並みを考える会」理事長の佐藤健太良さん、事務局長の加瀬正人さん、交流館館長の高谷正弘さんをはじめとする「考える会」のみなさま、椎名喜予さんをはじめとする佐原商工会議所のみなさま、また県立佐原高校元教諭の田中三郎先生、現教諭の成田賢一先生をはじめとする多くの先生方、また佐原まちづくりプロジェクトのメンバーとして高校生の立場から佐原への率直な思いを語ってくださった佐原高校のみなさまには、研究はもとより佐原プロジェクトとの関わりにおいても、とりわけ多くのご協力とご激励をいただきました。深くお礼申し上げます。

また、ここにお名前を記し切ることはできませんでしたが、佐原でお世話になりました ka 地域の方々や佐原に関わられている方々、観光客・ボランティアのみなさまからも多くのご意見、ご協力をいただきました。佐原の居酒屋で飲んだ地酒、昔ながらに「維持」されてきた銭湯、地域で出会った方々と交わした言葉の一つひとつに多くを学びました。本当にありがとうございました。

そして、執筆をするにあたって、社会文化環境学専攻清水研究室のみなさまには様々なご助言とご激励を賜りましたことお礼申し上げます。博士課程に在籍されている岡田航さん、望月美希（岩崎美希）さんのご両名には専門外の分野であるにもかかわらず、多大なご助言賜りました。心よりお礼申し上げます。また、同研究室修士課程に在籍されている好井荘さんは同じく修士論文を執筆する研究室の一員であるだけでなく、祭礼参加経験を持つ地方出身者から率直な意見をいただきました。また、同研究室の同期入学である三枝七都子さんは修士１年のときからゼミや研究室等で幅広い意見を寄せてくださり、研究室の中でも近い立場からさまざまにご協力いただきました。お二方をはじめ、研究室のメンバーや卒業生のみなさま、同専攻の同期の存在は論文を執筆するうえで大きな励みとなりました。深く感謝申し上げます。

最後に、大学院生活を心から応援してくれた家族、とりわけ文句を垂れながらも山車のイラストを描き上げてくれた妹と筆者以上に筆者の体調管理に関心を寄せていた母には格別の感謝を申し上げます。

長くなりましたが以上を以って、謝辞とさせていただきます。